太田·黒田遺跡 第52次発掘調査概報

2002

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

序 文

和歌山市は、紀淡海峡を望む和歌山県の北西端に位置し、本市の中央を西流する紀ノ川の恵みをうけた和歌山平野を中心とした地域であります。この肥沃な平野部には、古くから様々な人々が生活を営み、市域には数多くの遺跡が残されています。

そのなかでも今回発掘調査を行いました太田・黒田遺跡は、弥生時代前期に始まる県内最大規模の集落跡としてよく知られている遺跡であります。また雑賀衆の城である太田城は、秀吉軍によって水攻めを受けたことが伝承されています。

調査の結果、弥生時代前期から江戸時代にかけての数多くの遺構・遺物が見つかりました。とくに弥生時代前期の土坑や中期初頭の井戸などは、太田・黒田遺跡の成り立ちを考える上で貴重な資料になるものといえます。

ここに報告する調査成果が、広く私たちの郷土に関する歴史認識を豊かにすることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査にあたりご指導、ご協力を頂きました関係 各位の皆様に深く感謝いたします。

平成14年3月31日

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団 理事長 喜 多 誠 一

例 言

- 1. 本書は、株式会社浅川組が和歌山市太田485-1番地に計画した集合住宅建設に先立つ発掘調査 の概要報告書である。
- 2. 調査は、株式会社浅川組の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、対 象面積約120㎡を2001年8月28日から同年10月23日までの期間で実施した。

3. 発掘調査及び報告書刊行にかかわる事務局は下記のとおりである。

和歌山市教育委員会

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

教育長 山口喜一郎

理事長

喜多誠一

文化財室長 榎本直樹

総務室長 髙野真次郎

文化財班長 田中郁次

総務室班長 久保雅英

学芸員 益田雅司

主事

山口美二 (調査庶務担当)

学芸員

藤藪勝則(発掘調查担当)

- 4. 本概報掲載の遺跡・遺構及び遺物写真撮影は藤藪のほか学芸員川口修実が行った。
- 5. 本書の執筆は発掘調査担当の藤藪のほか学芸員北野隆亮・奥村薫・川口が分担し、編集は藤藪 が行った。各執筆分担の文責は目次に示した。
- 6. 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
- 7. 概要報告書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の 意を表します。

本文目次

1.	1. 調査の契機と経過	(藤藪勝則)	1
2.	2. 位置と環境	(*)	2
3.	3. 太田・黒田遺跡の既往の調査	(*)	4
4.	4. 調査の方法と経過	(*)	5
	(1)調査の方法		
	(2)調査の概要		
5.	5. 遺構	(藤藪)	7
	(1) 第3遺構面検出の遺構		
	(2) 第2遺構面検出の遺構		
	(3) 第1遺構面検出の遺構		
6.	6. 遺物		
	(1) 弥生時代前期の土器	(藤藪)	14
	(2) 弥生時代中期の土器	(//)	15
	(3) その他の弥生土器		18
	(4) 古墳時代の土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	(//)	18
	(5) 平安・鎌倉時代の土器	(奥村 薫)	22
	(6) 輸入陶磁器・その他	(北野隆亮)	25
	(7) 石器・石製品	(藤藪・川口修実)	27
	(8) 金属製品	(奥村)	31
	(9) 土製品	(*)	31
	(10) 骨角器	(")	31
7	7. まとめ	(藤藪)	32

図版目次

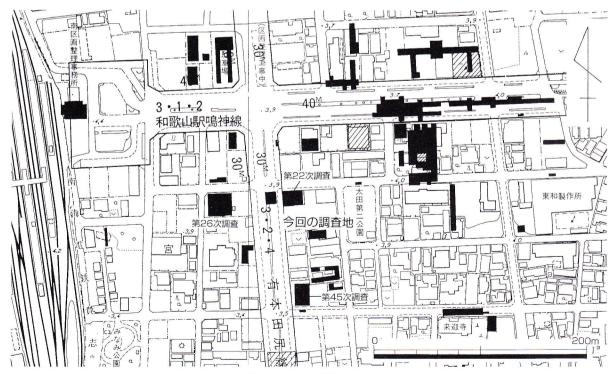
- 図版1 調査前の状況 (西から)、第3遺構面全景 (西から)
- 図版2 第2遺構面全景(西から)、第1遺構面全景(西から)
- 図版3 SK-29 (北東から)、SK-25 (南から)
- 図版 4 SK-27 (北から)、SK-27土層堆積状況 (東から)
- 図版 5 SB-2 (東から)、SB-2 土層堆積状況 (南から)
- 図版 6 SB-1 (北東から)、SK-5 (北から)
- 図版7 SK-2 (東から)、SK-13 (南から)
- 図版8 調査区南壁Y=-73937m付近土層堆積状況(北から)、サブトレンチ3土層堆積状況(北から)
- 図版 9 SK-29·25·27出土土器
- 図版10 SK-27、SB-1·2出土土器
- 図版11 SK-5出土土器
- 図版12 SK-5出土土器
- 図版13 SK-2出土土器
- 図版14 SK-13出土土器
- 図版15 SE-1出土土器
- 図版16 輸入陶磁器、石器
- 図版17 石器
- 図版18 石器、石製品、金属製品、土製品、骨角器

1. 調査の契機と経過

太田・黒田遺跡は、紀ノ川下流南岸の和歌山平野のほぼ中央部に位置し、平野部でも微高地にあたる地点であり、数多くの遺跡が分布する地域に所在する。この遺跡は、これまでに51次にわたる発掘調査が行われ、弥生時代前期の環濠や竪穴住居、中期の竪穴住居や井戸など多数の遺構を検出し、直柄広鍬や鋤などの木製農耕具、さらに銅鐸・銅鏃などの金属器や絵画土器(鹿)を含む多量の弥生土器などが出土しており、弥生時代前期から中期にかけての県内最大規模をほこる集落跡であることが知られている。また、弥生時代以降では古墳時代から江戸時代にかけての遺構、遺物が多数検出され、特に室町時代には羽柴秀吉に水攻めされた太田城跡の推定地が重複するなど複合遺跡としても周知されている(第1図)。

今回の調査地は、太田・黒田遺跡のほぼ中央部、太田城跡の中央やや北側に位置する。調査地の周辺における調査には、北西約20mの距離に位置する第22次調査において、弥生時代中期の竪穴住居3棟、また16世紀代の溝状遺構などが検出されている。さらに南へ約60mの距離に位置する第45次調査では、弥生時代前期の環濠を2条検出し、西に約90mの距離に位置する第26次調査検出の大溝の延長と考えられることから、太田・黒田遺跡の弥生時代前期集落南西部の範囲が明らかにされている。

今回の調査は、和歌山市太田485-1番地において集合住宅が建設されることになり、この建設場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である太田・黒田遺跡(遺跡番号327)及び太田城跡(遺跡番号356)の範囲内であったため、第52次調査として発掘調査を実施することとなった。調査は和歌山市教育委員会の指導のもと、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が株式会社浅川組から委託を受けて実施した。また現地における調査の期間は、平成13年8月28日から同年10月23日までの約2カ月間を要した。



第1図 調査位置図

2. 位置と環境

和歌山市は、和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市に、 東は和歌山県那賀郡岩出町及び貴志川町に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。奈良 県の大台ヶ原を源とする紀ノ川は、本市のほぼ中央を流れて紀伊水道に注いでおり、度重なる流路 方向の変化により運ばれた土砂によって和歌山平野が形成されている。

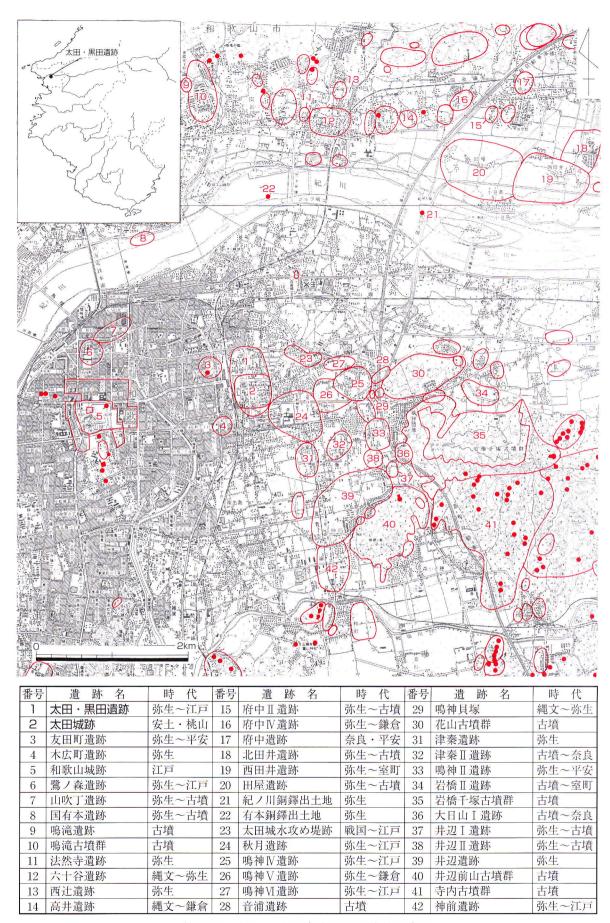
太田・黒田遺跡(1)は、この和歌山平野の紀ノ川南岸平野部に立地する弥生時代から江戸時代 にかけての複合遺跡である。当遺跡が所在する和歌山市太田及び黒田周辺から秋月・鳴神地域にか けては、平野部のなかでも標高4m前後を測る微高地にあたる(第2図)。

周辺の遺跡について概観すると、縄文時代の遺跡では吉礼貝塚や国史跡として指定されている鳴神貝塚 (29) がある。吉礼貝塚では、縄文時代前期前半から後期の遺物が出土し、また鳴神貝塚では縄文時代中期から弥生時代前期の土器や、土坑墓からは耳栓などの装身具とともに門歯を抜歯したシャーマンと考えられる女性の人骨などが見つかっている。これらの貝塚からは、海水性の貝殻が多く出土することから、当時の海岸線は岩橋山塊西麓にまで及んでいたと推定されている。

また弥生時代の遺跡としては、太田及び黒田、秋月地域周辺に弥生時代前期から集落が営まれている。日前・国懸神宮を中心に広がる秋月遺跡(24)では弥生時代前期の石器製作に関わると考えられる土坑や、遺跡の南東部を北東から南西方向に流れる自然流路が検出されている。また流路が埋没した後は同じ方向性をもつ弥生時代中期の溝が再掘削されており、水路として利用されていたと考えられている。

古墳時代では、集落跡として秋月遺跡や岩橋山塊西麓に位置する鳴神遺跡群(25~27)、音浦遺跡(28)、大日山 I 遺跡(36)があげられる。これらの遺跡では、竪穴住居や掘立柱建物などのほか古墳時代前期以降の用水路と考えられる溝が多数検出されている。また友田町遺跡(3)では古墳時代前期の竪穴住居や後期の掘立柱建物が検出されている。この掘立柱建物の柱穴は布堀状のホリカタを掘削し、埋め戻した後に再度柱穴を掘削する特徴的なもので、県内では鳴滝遺跡の倉庫群などにおいて類例がみられる。古墳については、平野部の秋月遺跡において出現期の前方後円墳がみられるほか、鳴神V遺跡(26)では微高地上に古墳時代前期から後期の方墳群が築造されている。さらに太田・黒田遺跡の西約2㎞の花山、岩橋丘陵には、古墳時代前期から中期にかけての花山古墳群(30)や、国の史跡で古墳数600基をこえる岩橋千塚古墳群(35)が築造されている。

奈良・平安時代以降については、当遺跡の東約700mの秋月の地に鎮座する日前・国懸神宮が『日本書紀』に記され、この周辺は紀ノ川左岸の条里地割りが良好に残る地域である。また鳴神V遺跡では掘立柱建物や溝、さらに円面硯などの遺物が検出され、官衙的な施設の存在した可能性が考えられている。さらに秋月遺跡では、奈良時代のものと考えられる井戸から須恵器の蓋杯・壺、土師器の蓋杯・皿・高杯・壺などが一括出土している。そのほか太田・黒田遺跡の南半部は、天正十三年(1585)、羽柴秀吉の紀州攻めの際に水攻めが行われたと推定されている太田城跡である。第1~9・17・19次調査では東西方向にのびる幅10m、深さ3mを測る中世末期の大型濠状遺構が検出されており、太田城と関わりをもつ遺構として注目されている。また太田・黒田遺跡の北東約800mに残る出水の堤跡(23)は、水攻め時の堤が残存したものと考えられている。



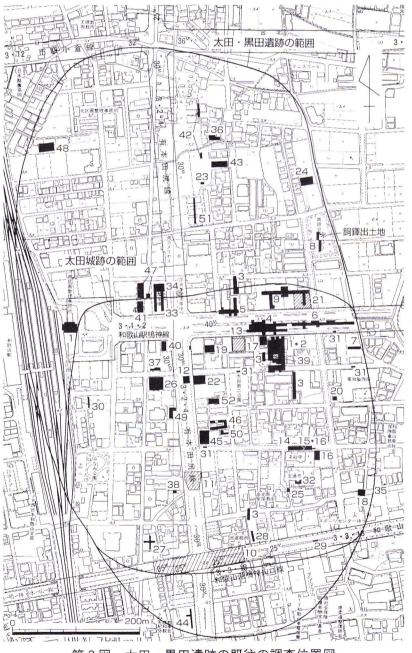
第2図 太田・黒田遺跡周辺の遺跡分布図

3. 太田・黒田遺跡の既往の調査

太田・黒田遺跡は昭和43(1968)年の調査以来、過去51次を数える調査が行われ調査成果が蓄積されつつある。既往の調査のうち第1~25次調査については『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』に、第27~32次調査については『太田・黒田遺跡第33・34次発掘調査概報』に、また第35~42次調査については『太田・黒田遺跡第43次発掘調査概報』にそれぞれ概略についての記載がある。そのほか第44・45次調査については『太田・黒田遺跡第45次発掘調査概報』に、また第46~50次調査はそれぞれ既刊の概要報告書に調査成果の記載がある。よってここでは第51次調査の位置及び調査概要について記述するものとする(第3図)。

第51次調査は、遺跡の中央部でもやや北側にあたる地点に東西約1.5m、南北約40mの南北に長い

調査区を設定し行ったものである。 調査の結果、3面の遺構面を検出し、 弥生時代前期から中世にかけての 多数の遺構・遺物を検出している。 特に弥生時代のものでは、幅約3.6m、 検出面からの深さ約1.8mを測り、 主軸を北西から南東方向にもつ弥 生時代前期に機能していたと考え られる溝がある。この溝は、第26 次・45次調査で検出された弥生時 代前期環濠と形状・埋没年代など が近似することから、それらと対に なる環濠と考えられている。よっ て、今回検出された溝は、その方向 性と位置関係から太田・黒田遺跡 の弥生時代前期集落の規模や範囲 を推定する上で重要な資料になる と考えられる。古墳時代の遺構とし ては、平面形が隅丸方形のプランを もち覆土から古墳時代初頭の土器が 出土した竪穴住居と方形のプランを もち古墳時代前期の土器が出土した 竪穴住居の2棟を検出している。奈 良時代の遺構としては土師器や須 恵器杯身・杯蓋が出土した土坑や、 中世では遺構の断面形が擂り鉢状 を呈する土坑などが検出されている。



第3図 太田・黒田遺跡の既往の調査位置図

4. 調査の方法と経過

(1)調査の方法

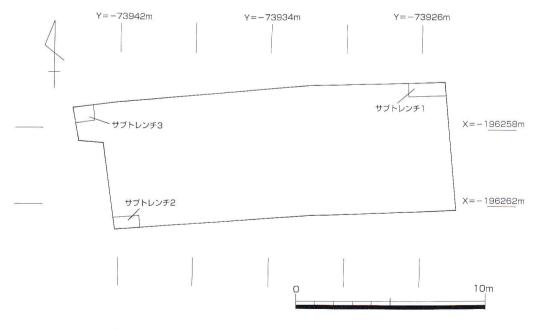
調査地の現況は、盛土された宅地である(図版1の上)。調査は、掘削深が深くなると予想される 建物の基礎部分を中心に東西約17m、南北約7mの東西に長い調査区を設定した(第4図)。

重機による掘削は、整地土及び近現代の耕作土(第1層)、さらにそれに伴う床土と考えられる第2層までとし、第3層以下の遺物包含層及び遺構の調査については人力掘削によって行った。溝や土坑などの遺構掘削については、土層堆積観察用のセクションベルトを直交するライン上に設け、2層以上の堆積が確認できるものについては写真撮影及び土層断面実測による記録保存を行った。また、下層の土層堆積状況を確認するために調査区の北東隅にサブトレンチ1、南西隅にサブトレンチ2、北西隅にサブトレンチ3を設定し下層調査を行った。土層の色調及び土質観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。遺物の取り上げについては、国土座標の整数値に合った測量杭を調査区内に設置し、4mメッシュの単位ごとに取り上げた。

遺構平面図などの図面による記録は、国土座標の整数値に合致した測量杭を調査範囲内に設置し 遺構実測の基準とした。遺構平面図及び壁面土層堆積状況図については、1/20の縮尺とし、特に重 要と判断した遺構の平面図及び土層断面図については、1/10の縮尺を用い手実測で行った。また遺 構全体平面図については、1/20の縮尺を用い手実測で行った。さらに遺跡の水準は、国家水準点 (T.P.値)を基準とした。

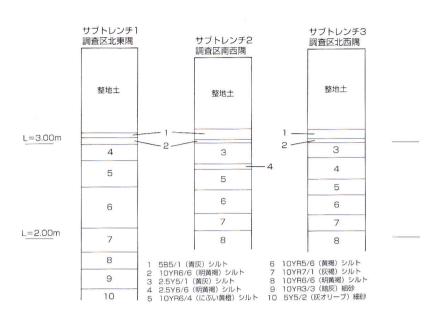
(2)調査の概要

調査地の基本層序については、第5図に示したとおりである。現表土は厚さ $40\sim50$ cmを測る整地土である。第1層は、厚さ $5\sim15$ cmを測り、調査区の全面においてみられるもので近現代の耕作土と考えられる。第2層は、厚さ $3\sim6$ cmを測り第1層に伴う床土とみられる。第2層を除去した第



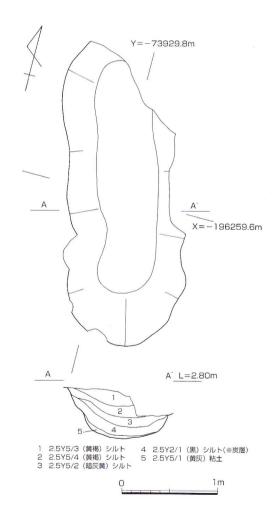
第4図 調査地区割図

3層上面は、標高約3.0mを 測り、江戸時代の土坑・溝 など検出した遺構検出面で 5~20cmを測るものでまる。この東部ではみられで 季区の東部ではみられず第3 層からは、備前徳利、信察 水指などの国を関した。第3 層がらとから室町時代の 物包含層と判断した。第4 層は、厚さ6~20cmを測した。第4 層は、厚さ6~20cmを割り、 上面の標高は2.8m~3.1m を測り東から西にかけて低



第5図 調査地土層柱状模式図

くなる。この第4層上面は、弥生時代中期から鎌倉時代にか けての遺構検出面である。第4層からは、クシ描直線文やク シ描波状文を施す弥生土器が出土し、凹線文をもつものがみ られないことから弥生時代中期前半の遺物包含層と判断し た。また第4層下には、厚さ15~20cmを測るにぶい黄橙色の シルト (第5層) が堆積する。第5層上面の標高は2.6~2.8m を測る。この第5層上面は、弥生時代前期から中期初頭にか けての遺構検出面である。今回の調査では、平面的な調査は この第5層上面まで行うことができた。第5層以下には、サ ブトレンチ1~3の調査結果から、調査区の全面に厚さ20cm ~40cmを測る第6層がみられる。この第6層上面は標高2.4~ 2.5mを測り、調査区東部の遺構底面の状況や撹乱の壁面観察 から遺構の切り込みが確認された。よって、遺物の出土はみ られず詳細な時期は不明ながら遺構面として把握できるも のと考えられる。第6層下については灰褐色のシルトで厚さ 20~25cmを測る第7層や、厚さ約10cmを測る第8層が堆積す る。第7層上面の標高は2.1~2.3mを測り、第8層は1.9~2.1 mを測る。これらは第4~6層が東から西に傾斜して堆積す るのに対し西から東に傾斜するもので、堆積方向の違いとし て注目すべきことと考えられる。また、第9層は厚さ20cmを 測る暗灰色の細砂、第10層は灰オリーブ色の細砂である。こ れら第7層以下の各層からは遺物が出土しなかった。



第6図 SK-29遺構平面図及び断面図

5. 遺構

今回の調査では、第6層上面(第4遺 構面)、第5層上面(第3遺構面)、第4 層上面(第2遺構面)、第3層上面(第1 遺構面)の4面の遺構面を確認し、弥生 時代前期から江戸時代にかけての多くの 遺構を検出した。

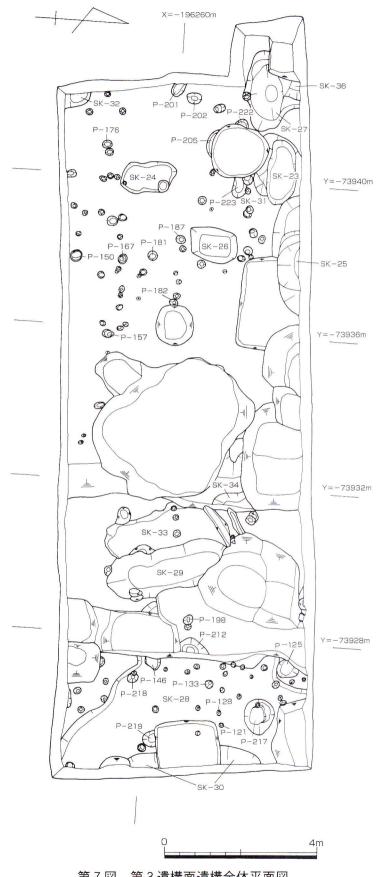
以下、古い時期のものから各遺構検出 面ごとに遺構の記述を行い、なかでも特 に重要と考えられるものについては個別 に説明を行う。なお、第4遺構面につい ては、サブトレンチによる調査で確認し たことから、詳細は明らかにすることが できなかった。

(1)第3遺構面検出の遺構

第3遺構面は、標高2.6~2.8mを測り、 調査区の東から西にかけて低くなる。こ の遺構面では、弥生時代前期末の土坑 (SK-29・25・24) や弥生時代中期初頭 の土坑 (SK-27) などのほか多数のピッ トを検出した(第7図、図版1の下)。

[SK-29] (第6図、図版3の上)

SK-29は、調査区の東部分で検出した もので、南北に長い楕円形状を呈する。 規模は、東西約1.2m、南北約3.2m、深さ 約50cmを測るもので、主軸はN-16°-Wの方向性をもつ。覆土は5単位に分け られ、下層には黒色の炭が厚く堆積する ものである。第1・2層は黄褐色のシル トであり、第3層は暗灰黄色のシルト、 第4層は厚さ約10cmを測る黒色の炭層で ある。また第5層は黄灰色の粘土である。 この土坑の時期はヘラ描直線文を多条に 施す弥生土器が出土したことから弥生時 代前期末のものと考えられる。



第7図 第3遺構面遺構全体平面図

[SK-25](第8図、図版3の下) SK-25は、調査区の北西部、 北壁際において検出したもの で、東西約3.2m、南北70cm以上 を測る。この土坑の底面は、西 側に比べやや東側が深くなるも ので深さ約70cmを測る。東西に 主軸をもつ土坑と考えられる が、北側が調査区外に続くため 遺構の形状は確認できなかっ た。調査区北壁において土層の 堆積状況を確認すると、覆土は 6単位に分けられ、第1層には

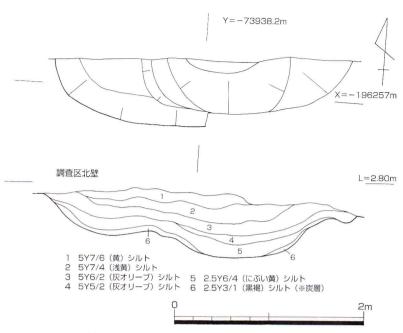
黄色のシルト、第2~4層には

黄褐色系のシルトが堆積しており、第5層はにぶい黄色のシルトとなり粘性が強くなる。また、第6層は炭層である。遺構の時期については、覆土内からヘラ描直線文を多条に施す壺などが出土したことから、弥生時代前期末のものと考えられる。「SK-24」(第7図)

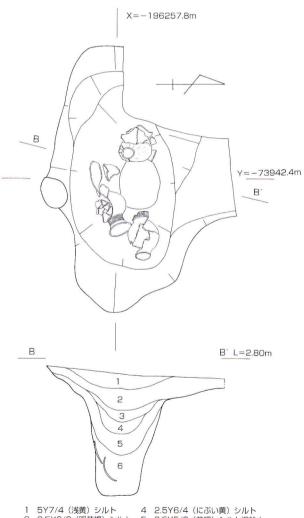
SK-24は、調査区の西部において検出したもので、東西約80cm、南北約1.4m、深さ約12cmを測るものである。覆土は2単位に分けられ、上層にはにぶい黄橙色のシルトが堆積する。これは基本層序第5層と類似した土色・土質であるが、下層には黒褐色の炭層が厚く堆積する。また、底面には部分的に焼土がみられ、骨角製の刺突具(第30図、137)が出土した。これら覆土の状況や出土遺物はこの土坑の性格を考える上で注目される。

[SK-27] (第9図、図版4)

SK-27は、調査区の北西隅において検出したもので、北西部分は撹乱によって削平されている。 規模は、東西約2.1m、南北約1.5m、深さ約1.2m を測るもので、ほぼ東西に主軸をもつ楕円形状を 呈するものである。覆土は6単位に分けられ、第 1層は浅黄色のシルト、第2層は明黄褐色のシルト、第3層は暗灰黄色のシルト、第4層はにぶい



第8図 SK-25遺構平面図及び断面図



2 2.5Y6/6 (明積割 シルト 5 2.5Y5/3 (積褐) シルト混粘土 3 2.5Y5/2 (暗灰黄) シルト 6 2.5Y5/2 (暗灰黄) 粘土

0 1m

第9図 SK-27遺構平面図及び断面図

黄色のシルト、第5層は黄褐色のシルト 混粘土、第6層は暗灰黄色の粘土である。 底面近くからは、頸部にヘラ描直線文と クシ描直線文を併用する広口壺やヘラ描 直線文のみを施す広口壺、及び紀伊形甕 2個体(第18図、10~13)が投げ込まれ たと考えられる状態で出土した。これら の土器は復元すると一部を欠くがほぼ完 全な形になることから、この土坑が埋め られる際の祭祀に使用されたものとみら れ、遺構の性格としては、井戸になるも のと考えられる。遺構の時期は、覆土内 から出土した弥生土器にヘラ描直線文と クシ描直線文がみられることから弥生時代 中期初頭のものと考えられる。

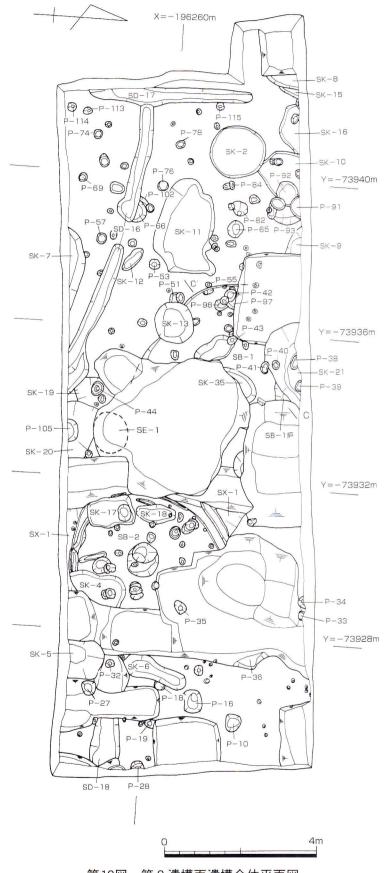
(2) 第2遺構面検出の遺構

第 2 遺構面は、標高2.8~3.0mを測り、調査区の東から西にかけて低くなる。この遺構面では弥生時代中期の竪穴住居(SB-1・2)や土坑(SK-6・21)、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての土坑(SK-5)、鎌倉時代の溝(SD-16・17)や土坑(SK-2・13)、井戸(SE-1)などを検出した(第10図、図版2の上)。以下、竪穴住居については遺存状態のよいSB-2から記述することとする。

【弥生時代の遺構】

[SB-2] (第11図、図版5)

SB-2は、調査区の東部分で検出したものである。この住居は床面が2面確認でき、それぞれに対応する壁溝がみられるもので新しい時期のものを2aとし、古い時期のものを2bとして説明する。まず2a段階のものは、直径約4.0mを測る円形のプランをもつもので、床面の標高は約



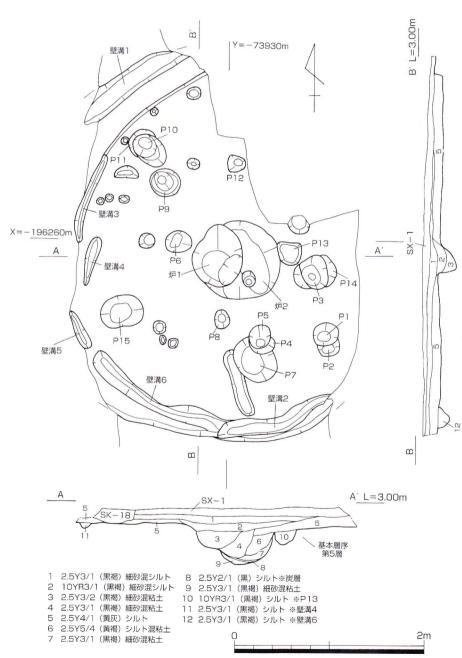
第10図 第2遺構面遺構全体平面図

2.8mを測る。壁溝は北側(壁溝1)が幅約24cm、深さ約15cm、南側(壁溝2)が幅約20cm、深さ約12cmを測る。住居の中央には東西約55cm、南北約65cm、深さ約20cmを測る炉跡(炉1)がみられ、炉内には炭や焼土を含む黒褐色の細砂混粘土(第3層)が堆積していた。土層断面観察の結果、この炉跡は同一の床面で少なくとも2回の掘削がみられ、古い段階のものは深さ約30cmを測る。覆土は、黒褐色の細砂混粘土(第4層)で、炭や焼土を含むものである。炉跡の周辺には主柱穴と考えられるピット(P3・P7・P10・P15)がみられ、復元すると5本柱であった可能性がある。

また、住居内の覆土は2単位(第 $1\cdot2$ 層)に分けられ、第1層は黒褐色の細砂混シルトであり、第2層は同じく黒褐色の細砂混シルトで炉の上部を中心に認められた。2b段階のものは、直径約3.8 mを測る円形のプランをもつもので、前述した2a段階の住居はこの住居の炉及び主柱穴を踏襲して建てられたものとみられ、

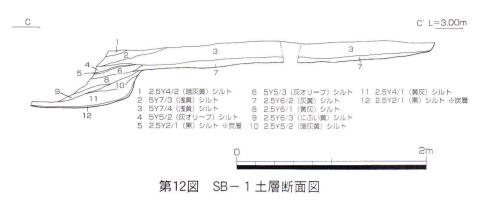
床面の標高は約2.7mを測る。壁溝については、住居の西側から南側において壁溝3~6を検出した。そのなかで壁溝6は幅約22cm、深さ約15cmを測るものである。北側の壁溝については確認できなかったが、2a段階の住居の床面から約10cmほどの落ちこみを確認した。

また炉跡(炉2)は2a段 階の炉跡のやや東側にみら れ、東西60cm以上、南北約 80cm、深さ約30cmを測るも のである。炉内には黄褐色 のシルト混粘土 (第6層) や黒褐色の細砂混粘土(第 7層)、及び炭(第8層)や 黒褐色の細砂混粘土 (第9 層)が堆積する。主柱穴に ついては、2a段階の柱穴と 重複するものが多く、それ らのほかにP11 · P12 · P13 · P14を検出した。これら時 期については、2a段階の炉 内からクシ描波状文をもつ



第11図 SB-2 遺構平面図及び断面図

広口壺が出土したこと から弥生時代中期のも のとみられ、2b段階の 住居は2a段階の住居が そのプランを踏襲する 関係からそれほどの時 期差のない住居とみら れる。よって2a段階の



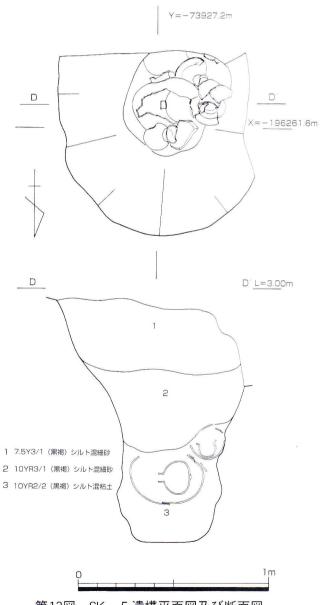
住居は2b段階の住居を拡張して建てられたものと考えられる。

[SB-1] (第10・12図、図版6の上)

SB-1は、調査区の中央部やや北寄りにおいて検出したもので、円形のプランをもつと考えられる。この住居は、撹乱及び後世の遺構によって北西部と南西部を大きく削平されており、また北側

については調査区外へと続くとみられる。土層観察の結果、前述したSB-2と同様に2面の床面を確認した。よって新しい時期のものを1aとし、古い時期のものを1bとして説明する。1a・1b段階の住居は、ともに壁溝や主柱穴と考えられるものは確認できなかったが、調査区の中央部北壁際においてそれぞれの床面に対応する炉跡を検出した。この炉跡を中心として考えた場合の住居の規模は、直径約7.0mを測る。

次に土層堆積状況については、第1~3層まで が住居廃絶後の堆積であり、第4~7層までが1a 段階のものである。さらに第8~12層までが1b段 階の堆積となる。よって1a段階の住居は、1b段階 の住居床面に貼り床(第7層)を施し建てられた と考えられ、その住居床面の標高は、約2.6mを測 る。また、炉内の堆積(第4~6層)には炭層 (第5層)がみられる。1b段階の住居は、床面の 標高が約2.5mを測るもので、深さ約30cmを測る炉 跡(第8~12層)がみられるものである。炉内の 最下層(第12層)には炭層がみられる。住居の時 期については、1b段階の住居は炉内の最下層から 出土した弥生土器から弥生時代中期前半のものと 考えられる。また、1a段階の住居の時期について は、住居廃絶後に堆積した第3層から弥生時代中 期前半の土器が出土したことから、1b段階の住居



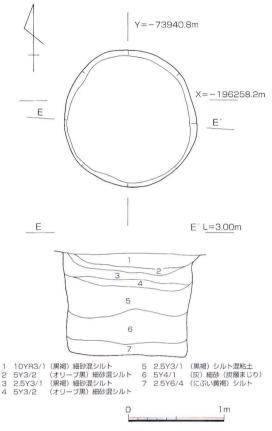
第13図 SK-5遺構平面図及び断面図

とあまり時期差はなかったものと考えられる。注目すべき遺物としては、1b段階の炉跡第12層からサヌカイト製の石庖丁(第28図、121)が出土した。

【古墳時代の遺構】

[SK-5] (第13図、図版6の下)

SK-5は、調査区の南東部分で検出したもので、南側は調査区外へと続くものである。規模は、直径約1.3mの円形状の土坑になるものとみられ、深さは約1.2mを測る。覆土は3単位に分けられ、第1・2層は黒褐色のシルト混細砂、3層は黒褐色のシルト混粘土となり、下層ほど粘性が強くなる。第2層以下からは多量の土師器が出土した。これらの土器群は、広口壺・細頸壺・甕・鉢で構成され、甕の胴部にはタタキ調整がみられた。また、完全に復元できるものが多数含まれる状況から、この土坑の性格としてはその平面プランや土層堆積状況から井戸と考えられ、廃絶時には多量の土器を廃棄する祭祀が行われた可能性がある。時期については弥生時代後期末から古墳時代前期ものとみられ、庄内式併行期と考えられる。



第14図 SK-2 遺構平面図及び断面図

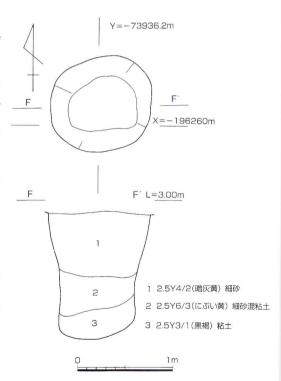
【鎌倉時代の遺構】

[SK-2] (第14図、図版7の上)

SK-2は調査区の西部において検出したもので、直径約1.4 m、深さ約1.1mを測り円形を呈する。覆土は7単位に分けられ、第1層は黒褐色の細砂混シルト、第2層はオリーブ黒色の細砂混シルト、第3層は黒褐色の細砂混シルト、第4層はオリーブ黒色の細砂混シルト、第5層は黒褐色のシルト混粘土、第6層は灰色の細砂、第7層はにぶい黄褐色のシルトである。この土坑からは大小の土師器皿や瓦器椀・皿が多量に出土したことから、遺構の時期としては鎌倉時代のものと考えられる。

「SK-13」(第15図、図版7の下)

SK-13は、調査区の中央部で検出したもので、直径約1.1m、深さ約1.3mを測る。覆土は3単位に分けられ、第1層が暗灰黄色の細砂、第2層がにぶい黄色の細砂混粘土、第3層が黒褐色の粘土で下層ほど粘性が強くなる。第2層以下の覆土からは、SK-2と同様に大小の土師器皿や瓦器椀が、また最下層から土師器の羽釜(第24図70、図版14の下)が出土した。遺構の時期としては、出土遺物から鎌倉時代のものと考えられる。



第15図 SK-13遺構平面図及び断面図

「SE-1] (第10図)

SE-1は、調査区の中央部にある撹乱の南壁面において検出したもので、調査途中で崩壊したものである。覆土内からは鎌倉時代の土師器や瓦器椀・皿が多量に出土した。

(3)第1遺構面検出の遺構

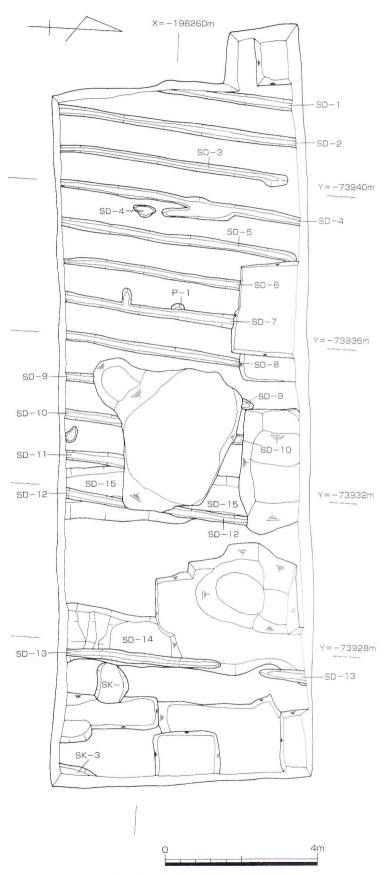
第1遺構面は、標高約3.0mを測る。この遺構面では江戸時代の溝(SD-1~15)、土坑(SK-1・3)などを検出した(第16図、図版2の下)。

$[SD - 1 \sim 13]$

SD-1~13は、幅約20~30cm、深さ約8cmを測るもので、覆土は単一である。これらの溝は、N-6°-Eの方向性をもち、約90cmの間隔で調査区のほぼ全面において検出した。調査区東側については、第3層がすで削平されていたことと同様にこの溝群も削平されていると考えられ、本来はさらに東へ続くものと考えられる。これらの時期については、覆土内から肥前系磁器が出土することから江戸時代のものと考えられ、遺構の性格としては畑作に伴う鋤溝と考えられる。

$\lceil SD - 14 \rceil$

SD-14は、調査区の東側において検出したもので、幅約1.4m、深さ20cm~40cmを測り、N-7°-Eの方向性をもち、ほぼSD-1~13の方向性と一致する。覆土は5単位に分けられ、第1層は黒褐色のシルト、第2層は褐灰色のシルト、第3層は黄灰色のシルト、第4層は灰色の粘土、第5層は黒褐色の粘土である。遺構の時期としては、覆土に肥前系磁器が含まれることから江戸時代のものと考えられる。



第16図 第1遺構面遺構全体平面図

6. 遺物

遺物は、各時代の遺構の覆土や、第3~5層の遺物包含層から収納コンテナ約40箱分が出土した。これらの遺物の内容は、弥生時代前期から中期にかけての弥生土器をはじめ、土師器、須恵器、黒色土器、中世土師器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、石器、石製品、金属製品、土製品、骨角器などがある。なかでも今回の調査では、弥生時代中期初頭、弥生時代後期末から古墳時代、鎌倉時代の遺物において一括性が高く重要視される土器群が出土した。以下これらの遺物を大きく時代ごとに分類してふれ、その後石器・石製品、金属製品、土製品、骨角器を個別に説明する。

(1) 弥生時代前期の土器

[SK-29出土土器] (第17図1~3、図版9)

1・2は広口壺である。1は口径は22.6cmを測るもので、口縁外端面には刻み目がみられる。また、頸部には幅約3mmのヘラ描沈線が5条確認できる。内外面の調整にはナデが施されている。2は頸部からゆるやかに外反する口縁部がのびるもので、口径は22.2cmを測る。また、口縁外端面には1条のヘラ描沈線が施され、頸部には多条のヘラ描沈線がみられるものである。

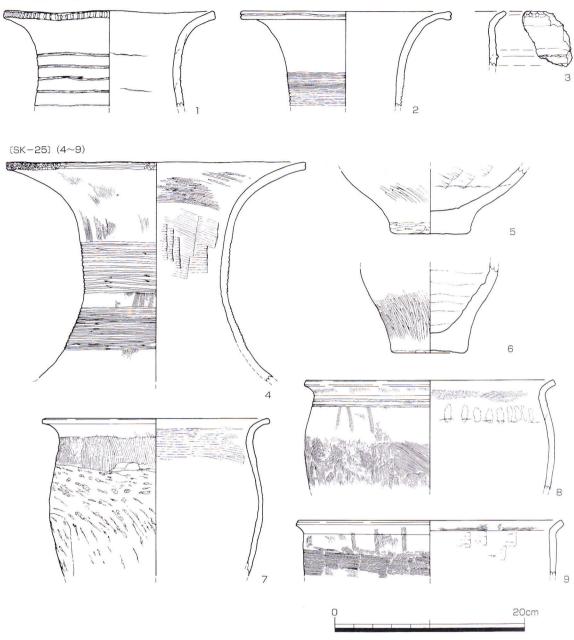
3 は紀伊形甕の口縁部から体部上半の破片である。口縁端部がやや外方へ屈曲するもので、口縁端部に刻み目を施すものである。また、口縁部下には断面三角形の貼り付け突帯がみられる。色調は暗褐色を呈する。

これらの土器の胎土には、 $1 \sim 5$ mm大の石英・長石・結晶片岩が含まれる。時期については、紀伊第 I 様式のものとみられ弥生時代前期末のものと考えられる。

[SK-25出土土器] (第17図 4~9、図版 9)

 $4 \sim 6$ は壺である。 4 は広口壺であり、頸部から大きく外反する口縁部がのびるもので、口径は 31.4cmを測る。口縁外端面には 1 条のヘラ描沈線がみられ、その上に幅約15cmを一単位として 4 ヶ所に×印の連続文が施されている。また、頸部には二段に分けてヘラ描沈線が多条にみられる。外面の調整にはタテ方向のハケが施され、内面の調整は頸部にヨコ方向のハケ及びナデが、口縁部にはヘラミガキがみられる。 5 は底径7.7cmを測るものである。外面の調整にはヘラケズリ後ナナメ方向のヘラミガキが施され、また内面の調整には板ナデ及び指ナデがみられる。 色調は乳褐色である。 6 は 5 と比較してやや直立気味に立ち上がる体部をもつもので、底径7.5cmを測る。外面の調整にはタテ方向のヘラミガキが施され、内面にはヨコ方向のナデがみられる。 色調は暗赤褐色で、胎土に結晶片岩がみられないことから、搬入品の可能性がある。

7~9は甕である。7は紀伊形甕である。口縁部がゆるやかに外反するもので、口径は23.5cmを測る。外面の調整はタテ方向のハケの後へラケズリを行うもので、体部上半にはナデを施すが先行するハケが残存する。また内面の調整はヨコ方向のハケの後体部下半をナデ消すものである。色調は赤褐色から暗褐色を呈し、体部には黒斑がみられる。8・9は遠賀川系の甕である。体部上半にやや丸味を持つもので口径は26.1cmを測る。口縁部と体部との境には2条のヘラ描沈線がみられるもので、外面の調整は、タテ・ナナメ方向のハケの後、体部上半をナデ消すものである。また内面の調整にはヨコ・ナナメ方向のハケ及び指オサエがみられる。9は、直線的な体部から短く屈曲す



第17図 遺物実測図1

る口縁部をもつもので、口径は27.7cmを測る。外面の調整は、タテ方向のハケの後ヨコ方向のハケがみられるもので、内面の調整には口縁部にヨコ方向にハケが、体部にはヨコ方向の板ナデが施されている。色調は乳褐色である。

これらの土器の胎土及び色調について特に記述のないものに関しては、 $1\sim5\,\text{mm}$ 大の石英・長石・結晶片岩が含まれ、また色調は暗褐色から褐色である。時期については、紀伊第 I 様式の範疇に含まれるもので、弥生時代前期末と考えられる。

(2) 弥生時代中期の土器

[SK-27出土土器] (第18図、図版 9 · 10)

10・11は広口壺である。10は卵形の体部からゆるやかに口縁部が外反するもので、口径は19.0cm

を測る。また口縁端部はわずかに上方へ肥厚し、外端面には1条のへラ描沈線と綾杉状の刺突文がみられ、頸部にはヘラ描沈線が多条に施されている。外面の調整はタテ・ナナメ方向のハケの後、底部付近にはナナメ方向のヘラミガキが施され、口縁部周辺ではヨコ方向のナデ消しがみられる。内面の調整は、体部から頸部の屈曲部に指オサエが施され、底部付近にはヨコ方向の板ナデの工具痕がみられる。また、口縁部の内面はヨコ方向のハケがナデ消されている。色調は淡褐色で、体部には黒斑がみられる。11は、胴部中位に最大径をもつもので、底径が10.8cmを測るものである。頸部には3条のヘラ描沈線がみられ、4条を一単位とするクシ描直線文が上段には3単位、下段には



-16-

2単位接するように施されている。外面の調整は体部上半から頸部にかけてはタテ方向のハケがみられ、体部下半にはナナメ方向ハケの後、底部付近にヘラミガキが施されている。内面の調整は、 頸部にヨコ・ナナメ方向のハケが施され、底部付近にはナデとその工具痕がみられる。また、体部から頸部の境には指オサエが施されている。色調は暗褐色である。

12・13は紀伊形甕である。12は小型のもので、体部上半にヘラケズリによる稜線が明瞭にみられる。口径は22.7cmを測り、口縁部下には2ヶ所に焼成後に外面から穿たれた円孔がみられる。色調は黒褐色から乳褐色を呈する。13は大型のもので口径33.2cm、器高46.8cm、体部最大径35.4cm、底径9.4cmを測る。口縁部よりも体部が外側に張り出すもので、体部下半には焼成後に外面から穿たれた円孔が3ヶ所にみられる。外面の調整は、体部下半よりナナメ方向のヘラケズリを施し、体部上半に至ってヨコ方向のヘラケズリを行うもので、幅約3.0cmを測るヘラケズリの原体が観察できる。また内面底部付近にはナナメ方向のナデが確認できる。色調は暗褐色から明褐色である。

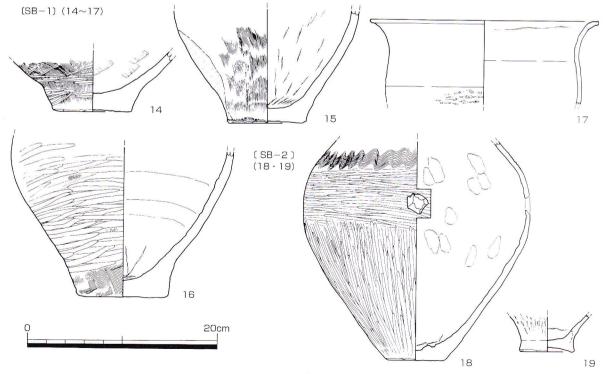
これらの土器の胎土には $1 \sim 5$ mm大の石英・長石・結晶片岩が含まれる。また時期については、紀伊第 $I \sim II$ 様式のものとみられ、弥生時代中期初頭のものと考えられる。

「SB-1出土土器」(第19図14~19、図版10)

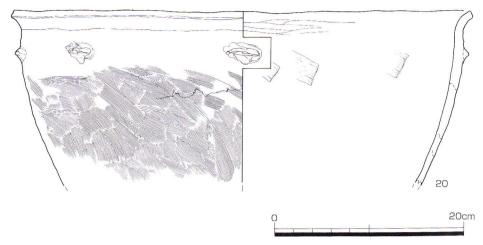
14~16は壺である。14は底部径8.4cmを測る。外面の調整にはタテ方向のハケの後ヨコ方向のヘラミガキが施され、また内面には板ナデの工具痕が残存する。15は底部径7.7cmを測る。外面には底端部から細かなタテ方向のハケが施され、内面には板ナデによる工具痕が明瞭に観察できる。色調は乳褐色である。16は底部径9.5cmを測る。外面には底端部からタテ方向のハケを施した後、体部下半からヨコ方向のヘラミガキを施すものである。色調は乳褐色である。

17は紀伊形甕である。口径に較べ体部最大径が小さくなるもので、口径は24.0cmを測る。

これらの土器の胎土及び色調について特に記述のないものに関しては、1~3 mm大の石英・長石・



第19図 遺物実測図3



第20図 遺物実測図4

結晶片岩を含むもので、色調は暗褐色である。また時期については、14がやや古い様相を呈するが、 紀伊第Ⅱ様式の範疇に含まれるものとみられ、弥生時代中期前半と考えられる。

「SB-2出土土器」 (第19図18·19、図版10)

18は壺である。体部上半には焼成後に内面から穿たれた円孔が1ヶ所みられるもので、底径6.0cm を測る。肩部にはクシ描波状文が一条施され、外面の調整は体部最大径を中心にヨコ方向のヘラミガキを施した後、体部下半にタテ方向のヘラミガキを行うもので、内面の調整にはナデと指オサエが施される。胎土には、 $1\sim4$ mm大の石英・長石・結晶片岩・チャートが含まれ、色調は外面が暗褐色、内面が乳褐色である。

19は紀伊形甕である。底部径5.3cmを測るものである。

これらの土器は、紀伊第Ⅲ様式のものとみられ弥生時代中期中頃のものと考えられる。

(3) その他の弥生土器 (第20図、図版10)

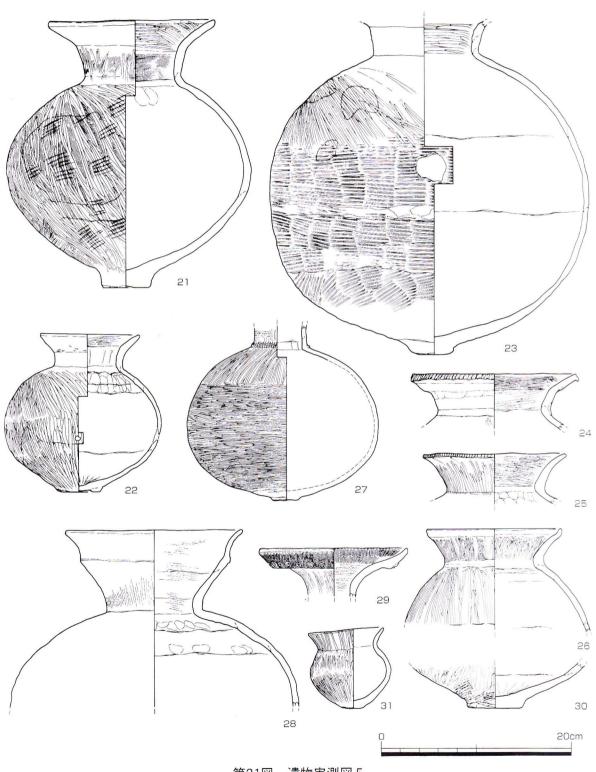
20は大形の鉢と考えられるもので、口径は48.4cmを測る。短く外反する口縁部のやや下方には、復元すると合計 8 個の把手が付加されていたものと考えられる。外面の調整にはナナメ方向のハケを施した後、口縁部周辺をナデ消すものである。また内面の調整は、ナナメ方向のハケの後ナデが施され、また口縁部付近にヨコ方向のヘラミガキが施されている。胎土には1~4 mm大の石英・結晶片岩を含み、色調は褐色から暗褐色である。

この土器の時期については、紀伊第 I 様式とみられ弥生時代前期のものと考えられる。出土位置はSB-1 b 炉覆土内である。

(4) 古墳時代の土器

[SK-5出土土器] (第21·22図、図版11·12)

21~26は広口壺と考えられる。21は体部が丸味をもつがやや扁平なもので口径17.3cm、器高27.9cm、 底径4.8cmを測る。外面体部の調整はタタキ成形された後、ナナメ方向のハケが施され、さらにナナ メ方向のヘラミガキを加えるものである。内面の調整は口縁部にヨコ方向のヘラミガキがみられ、 頸部にはヨコ方向のハケが施されている。体部中位には黒斑がみられ、色調は乳白色である。22は 球形の体部から緩やかに外反する口縁部をもつもので、口径10.3cm、器高16.5cm、底径4.0cmを測る。 また、体部下半には焼成後に外面から穿たれた円孔が一ヶ所みられる。外面体部の調整は底部及び 胴部中位、肩部に分けてタテ方向のヘラミガキが施されている。さらに口縁部と頸部との境にはヨ コ方向に爪状の圧痕がみられた。内面の調整は口縁部にヘラミガキが施され、頸部には板状工具の



第21図 遺物実測図5

圧痕が観察できる。23は球形の体部からやや外開き気味に頸部が立ち上がるもので、底径4.0cmを測る。体部中位のやや上方には焼成後に外面から穿たれた円孔が1ヶ所みられ、体部上半・中位付近及び体部下半には分割成形時の接合痕が明瞭に観察できる。外面の調整はタタキ成形された後、体部上半にナナメ方向のヘラミガキが施されている。また肩部には黒斑がみられ、色調は乳褐色から淡褐色である。24・25は口縁端部に刻み目を施すものである。24は口縁部外端面にやや粗い刻み目を施すもので、口径は17.0cmを測る。外面の調整は頸部から口縁部にかけて強いナデを施すもので、内面にはヘラミガキがみられる。25は24と比較すると細かな刻み目をもつもので、口径は14.7cmを測る。外面の調整にはタテ方向のヘラミガキが施され、内面にはヨコ方向のヘラミガキがみられる。色調は24・25ともに淡赤褐色である。26は、やや丸味をもつ体部からゆるやかに外反する口縁部がのび、口縁端部がやや内側に屈曲するもので、口径は13.9cmを測る。外面の調整は体部及び口縁部外面に上下に連続するヘラミガキが施されている。胎土は精良で細かな砂粒を含み、色調は明褐色である。上下に連続するヘラミガキが施されている。胎土は精良で細かな砂粒を含み、色調は明褐色である。

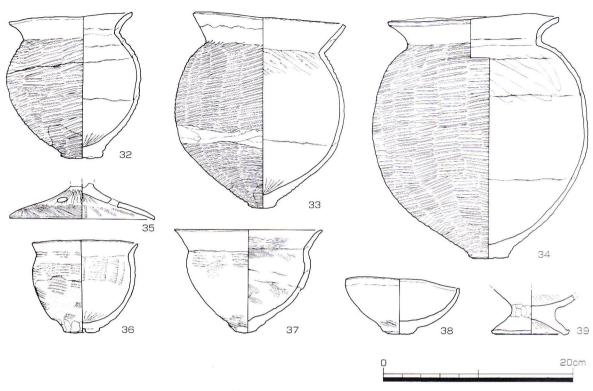
27~29は複合口縁壺である。27は体部下半に最大径をもつもので、底径2.8cmを測る。頸部と体部の境には断面三角形の突帯が貼り付けられており、細かな刻み目が施されている。外面の調整はタテ方向のヘラミガキの後、体部下半を中心にヨコ方向のヘラミガキが施されている。また頸部にはヨコ方向に爪状の圧痕がみられる。28はほぼ球形の体部をもつと考えられるもので、口径は18.5cmを測る。外面の調整は頸部付近にヘラミガキの痕跡がみられるほかは磨滅により不明瞭である。また内面については口縁部にヨコ方向のヘラミガキがみられる。29は口縁部内外面に2段のクシ描波状文を施し、口縁部外面にはさらに円形浮文に竹管文を施した装飾で加飾するものである。口径は15.4cmを測る。外面の調整は頸部にタテ方向のヘラミガキがみられ、内面にはヨコ方向のヘラミガキが施される。

30は壺の底部である。底部径5.6cmを測るもので、外面の調整はタタキ成形の後、タテ方向のヘラミガキを施すもので、また内底面にはクモの巣状のハケメがみられる。

31はミニチュアの壺と考えられる。口径7.9cm、器高8.4cm、底径2.0cmを測るもので、外面の調整にはタテ方向のヘラミガキが施されている。色調は明褐色で、胎土は精選されており細かな砂粒を含む。

32~34は大・中・小の関係にある甕である。それぞれ底部は平底で、口縁部には歪みがみられる。外面には平行タタキが施されるなど弥生時代の特徴を残すが、体部が球形化し口縁部への屈曲が鋭くなるなど新しい要素がみられるものである。32は口径12.9cm、器高15.0cm、底径4.5cmを測るもので、内底面にはクモの巣状のハケメと粘土紐の積み上げ痕が明瞭に観察できる。また33は口径15.6cm、器高20.0cm、底径2.2cmを測るもので、外面体部下半には幅1~2cmの間隔で粘土の貼り付け痕がみられる。これは分割成形に伴う接合時の粘土補充を施した痕跡と考えられる。また体部内面上半にはナナメ方向のヘラケズリが施され、内底面にはクモの巣状のハケメがみられた。これら32・33の底部付近には黒斑がみられる。34は口径17.8cm、器高25.4cm、底径4.1cmを測る。内面の調整には体部内面上半にナナメ方向のナデが施され、また粘土紐の積み上げ痕がみられる。

35は高杯の脚部である。脚部が「ハ」の字状に広がるもので、脚部径は15.0cmを測る。外面の調整にはタテ方向のヘラミガキを施した後、脚部下半にナナメ方向のヘラミガキを施すもので、内面



第22図 遺物実測図6

の調整にはヨコ方向のハケがみられる。

36~38は鉢である。36は内彎する体部に短く外反する口縁部をもつもので、口径11.0cm、器高9.7 cmを測るものである。底部は輪状の粘土を貼り付けるもので、底径3.3cmを測る。外面の調整は成形時の平行タタキをナデ消すもので、内面には板ナデが施され、内底面にはクモの巣状のハケがみられる。また体部下半には黒斑がみられる。37は外開き気味に立ち上がる体部からさらに外方へ屈曲する口縁部をもつもので、口径15.4cm、器高10.8cm、底径2.1cmを測る。外面の調整は成形時の平行タタキを施した後ナデ消しを行うもので、底部及び体部上半付近にはタタキが残存する。内面の調整は不定方向のハケを施した後ナデ消すもので、体部中位付近には粘土紐の積み上げ痕がみられる。38は緩やかに内彎する体部から明瞭に屈曲する口縁部をもたないもので、口径11.8cm、器高約5.8cm、底径2.5cmを測る。外面の調整は、底部付近に成形時の平行タタキが残存するほかは磨滅している。また内面の調整にはナデが施されている。

39は、脚台付きの鉢か杯と考えられる。体部下半から短く「ハ」の字状に広がる脚部をもつもので、脚部径は7.1cmを測るものである。外面の調整には体部から脚部への屈曲部に指押さえがみられ、内面の調整にはヘラミガキが施されている。また脚部内面には板状工具によるナデがみられる。

これらの土器の胎土及び色調について特に記述のないものに関しては、 $1\sim5\,\text{mm}$ 大の石英・結晶 片岩・長石・チャートを含むもので、色調は暗褐色から淡褐色を呈するものである。また時期については、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭のものとみられ、庄内式併行期と考えられる。

(5) 平安・鎌倉時代の土器

「SK-2出土土器」(第23図、図版13)

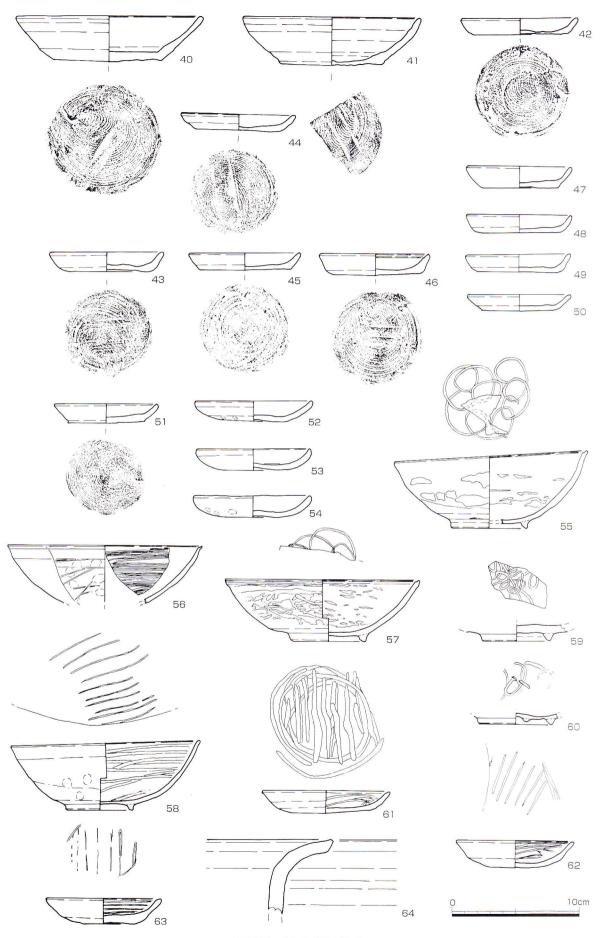
40~54は土師器皿である。40~51は底部に回転糸切り痕を残すものであり、この内40・41・44・ 46は板状圧痕がみられる。52~54は底部に指オサエ調整を行う手づくね成形のものである。40・41 は大皿で、40は口径14.4cm、器高3.5cm、41は口径13.8cm、器高3.8cmを測る。42~54は小皿である。 口径は8.6cmと8.0cmに2分することができ、器高は1.4cm前後である。43・45・51はタール状のもの が付着していることから灯明皿とみられ、48は二次焼成を受けている。52~54は口径8.8cm前後、器 高1.8cm前後を測る。55~60は瓦器椀である。55は口径15.2cm、器高6.1cm、高台径6.1cmを測り、内側 面に密なヘラミガキ、内底面に5回転の連結輪状文がみられる。56は口径15.2cm、残存器高4.5cmを 測り、内側面に平行線暗文、外面に指オサエ後粗いヘラミガキを施すものである。57は口径15.1cm、 器高4.8cmを測り、内外面には密なヘラミガキ、内底面に 3 回転以上の連結輪状文がみられる。55~ 57は口縁端部に沈線が施されていることから大和型の系譜をひくものと考えられる。58は口径14.7 cm、器高5.5cm、高台径5.3cmを測るもので、内底面に平行線暗文を施すものである。59は高台径1.3 cmを測り、内底面に密な連結輪状文がみられるものである。60は二重高台の椀底部で、接地しない 外底面の高台は径1.8cmを測る。高台は径5.6cmを測り、内底面に密な連結輪状文がみられ、その上に 重ね焼きの痕跡もみられる。61~63は瓦器皿である。61は口径9.8cm、器高2.0cmを測る。62は口径9.0 cm、器高2.2cmを測り、型作り成形の可能性がある。63は口径8.8cm、器高2.0cmを測り、手づくね成 形とみられる。61の暗文は内側面後内底面の順で施すものであるが、62・63は逆の順序で施したも のである。64は常滑焼の大甕である。口縁部の小片であるが、残存高5.8cmを測り、暗茶褐色のもの である。口縁端部を外反させ端部外側に面取りを行っている。この他、SK-2からは中国製白磁碗 1点、皿1点、越州窯系青磁碗1点が出土した。

「SK-13出土土器」(第24図、図版14)

65~70は土師器である。65・66は大皿であり、65は口径15.5cm、器高3.4cm、66は口径15.0cm、器高3.0cmを測る。67~69は小皿である。67は口径8.6cm、器高1.2cm、68は口径7.6cm、器高1.2cm、69は口径7.6cm、器高1.0cmをそれぞれ測る。これらの皿は全て底部に回転糸切り痕が観察できるもので、この内65・66・68・69には板状圧痕がみられる。70は釜である。口径25.4cm、鍔部径28.0cm、残存器高18.5cmを測り、口縁部外側面の3ヶ所にはほぼ等間隔の圧痕がみられる。71~73は瓦器椀である。71は口径14.9cm、器高5.5cm、高台径6.2cmを測り、外側面のヘラミガキは3~4単位で施され、内側面に平行線暗文、内底面に連結輪状文がみられる。口縁端部に沈線が施されていることから大和型の系譜をひくものとみられる。また、外面には重ね焼きの痕跡がみられる。72は口径15.5cm、器高4.9~5.4cm、高台径5.6cmを測り、外面は指オサエ、内側面に平行線暗文、内底面に連結輪状文の崩れたとみられる暗文が施される。73は口径13.5cm、器高5.4cm、高台径4.9cmを測り、外面は指オサエ、内側面に平行線暗文、内底面に平行線状暗文がみられる。また、外面と内底面には重ね焼きの痕跡がみられる。74は瓦器皿で口径9.6cm、器高2.1cmを測る。底部は指オサエ、内面は強いヨコナデがみられる。75は篠窯須恵器こね鉢の口縁部である。

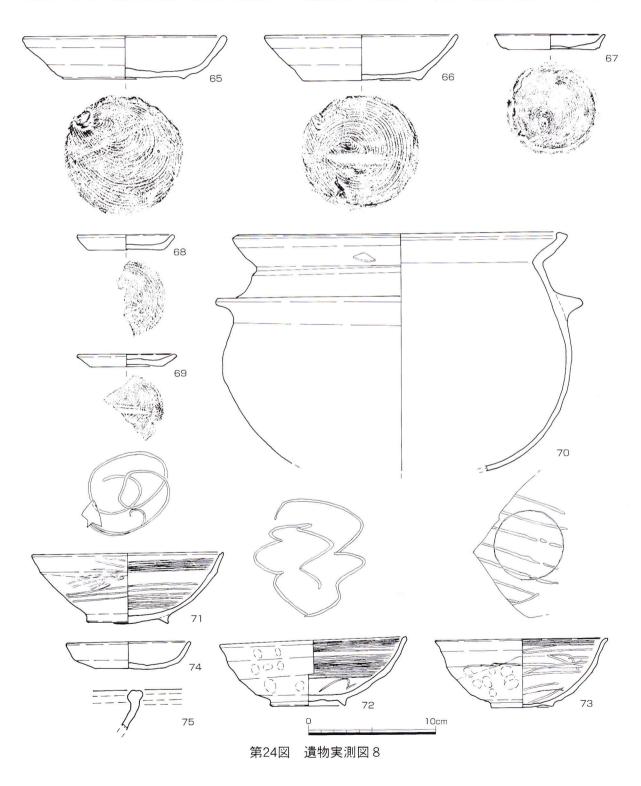
[SE-1出土土器] (第25図、図版15)

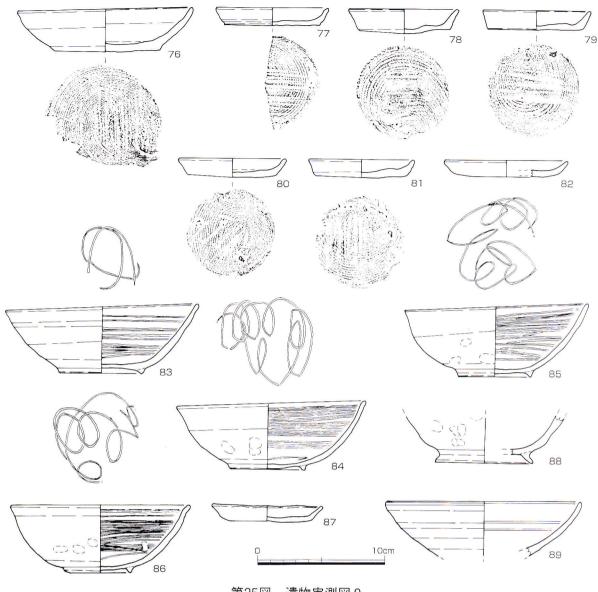
76~82は土師器皿である。76は大皿で、口径13.6cm、器高3.5cmを測る。77~82は小皿である。77



第23図 遺物実測図7

は口径8.7cm、器高1.4cm、78は口径8.4cm、器高2.1cm、79は口径8.3cm、器高1.5cm、80は口径8.2cm、器高1.5cm、81は口径8.2cm、器高1.5cmを測る。これらは全て底部に回転糸切り痕、及び板状圧痕がみられる。82は口径9.6cm、器高1.3cmを測る手づくね成形のものである。83~88は瓦器である。83~86は椀で、83は口径15.0cm、器高4.8~5.4cm、高台径6.3cmを測る。内側面に平行線暗文、内底面に2単位の連結輪状文が施され、内底面から内側面の順に施されているものである。84は口径14.7cm、器高4.8~5.7cm、高台径5.6cmを測る。内側面に平行線暗文、内底面に7単位の連結輪状文がみられる。





第25図 遺物実測図9

85は口径14.4cm、器高5.1~5.8cm、高台径5.7cmを測る。内側面に平行線暗文、内底面に6単位の連結輪状文がみられる。86は口径14.0cm、器高5.3cm、高台径4.6cmを測る。内側面に平行線暗文、内底面に5単位の連結輪状文がみられ、内底面から内側面の順に施されるものである。87は皿で、口径8.6 cm、器高1.3cmを測り、手づくね成形のものである。88は鉢の高台部である。残存高3.8cm、高台径7.6 cmを測り、ヘラミガキはみられないものである。89は中国製白磁碗である。口径15.4cm、残存高4.3 cmを測る。内面体部側面に2条の沈線が施されるもので、口縁端部に3単位の面取りがみられる。この他、SE-1からは中国製白磁碗1点が出土した。

(6)輸入陶磁器・その他(第26図、図版16の上)

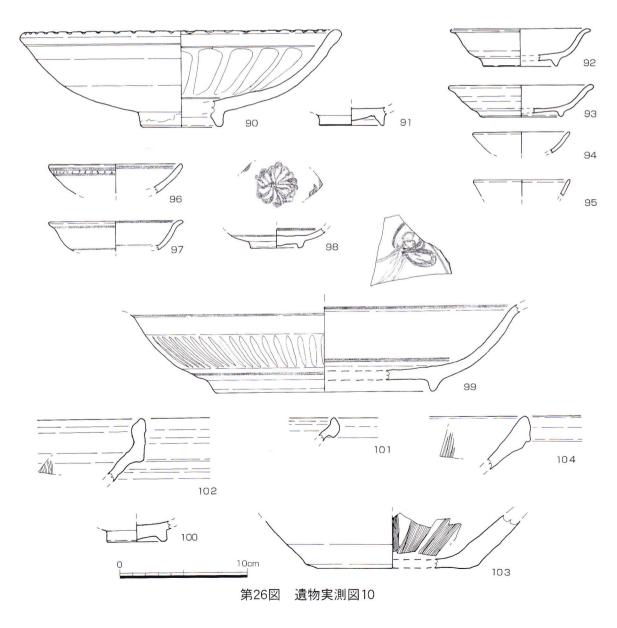
輸入陶磁器は中国製の青磁、白磁、染付、褐釉などが出土した。

90は中国製青磁平鉢である。口径25.2cm、器高7.6cmを測る大振りの平鉢で、黄緑色に発色し、全面に粗い貫入が入るものである。内側面は上下2条の沈線で区画された内部を丸ノミで彫り込み花

弁状としている。口縁端部には刻みがなされ、輪花状とするものである。中国製青磁はこの他、画花文碗が2点、鎬蓮弁文碗が1点出土しており、特に注意すべき遺物としてSK-2から越州窯系青磁碗の体部片1点が出土した。

91~95は中国製白磁である。91は外底部を露胎とする碗で、内面に白濁色の釉を施すものである。92・93は口縁部を端反りにする小皿であり、全面施釉だが高台畳付部周囲に硅砂が付着するものである。92は口径11.4cm、器高2.5cm、93は口径11.0cm、器高3.0cmを測る。94・95は小杯であり、全面に施釉されたものである。

96~99は中国製染付である。96~98は小皿である。96は口径10.6cm、残存高2.3cmを測る。口縁部を内湾させるもので、外面体部側面上位に2条の圏線に挟まれ烈点文が連続的に描かれる。97は口縁部を端反りにするもので、口径10.6cm、残存高2.3cmを測る。内側面の上下及び外側面の上下にそれぞれ圏線を巡らせるものである。98は内底面に菊花文を描き、側面との境界に圏線を巡らせるものであり、外側面下位にも圏線を1条巡らせている。口縁部は欠失しており、高台径4.2cm、残存高



1.5cmを測る。99は高台径17.4cm、残存高6.7cmを測る盤(大皿)である。口縁端部を欠失しているが、残存口径30.8cmを測るものである。内底面に濃筆を用いた花文を描き、側面との境界に圏線を2条、口縁端部を段状に外反させる境界にも1条以上の圏線を巡らせる。外側面についても、上下端の境界部に圏線1条をそれぞれ巡らし、その間を上下方向に丸ノミを用いて花弁状に彫り込んだものである。

以上の出土位置について、90はSK-1、SD-2、SX-1 からそれぞれ、91はSD-15、92と98は 撹乱から、<math>93と96はSK-4、94と95は第 3 層、<math>97はP-91、99はSD-14からの出土である。その 他、中国製では褐釉陶器の壺が 1 点出土している。

その他の焼物類では、瀬戸・美濃系陶器、東播系須恵器、備前焼、丹波焼、瓦質土器などが出土した。

100は瀬戸・美濃系天目茶椀の底部で、高台径4.7cmを測る。破片の周囲を打ち欠き円板状となっている。101は東播系須恵器こね鉢の口縁部である。102は備前焼擂鉢の口縁部、103は丹波焼とみられる擂鉢底部、104は瓦質土器擂鉢の口縁部である。

以上の出土位置は、100と102は第3層、101はSK-2、103は撹乱、104はSD-18から出土した。

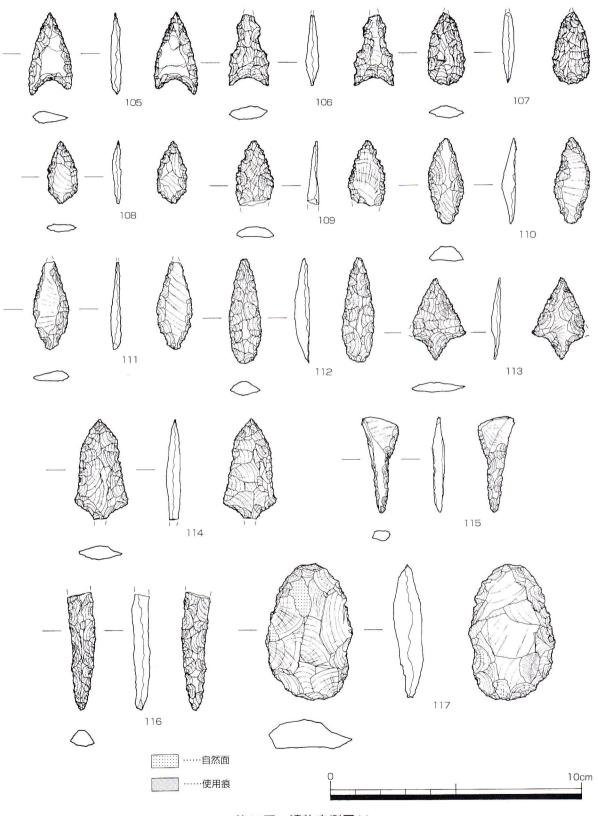
(7) 石器・石製品

石器・石製品については、打製石器として石鏃・石錐・尖頭器があり、また磨製石器ではサヌカイト製の石庖丁、結晶片岩製の石庖丁・太型蛤刃石斧などがある。礫石器としては、砂岩製の叩石や石皿が出土した。さらに石製品には結晶片岩製の有孔円盤がある。以下、打製石器から各項目ごとに分けて説明する。

[打製石器] (第27図、図版16の下・17の上)

105~114はサヌカイト製の石鏃である。そのうち105・106は凹基式のものである。105は表裏面と も素材剥片からの大剥離面を残すもので、全長3.2cm、最大幅1.7cmを測る。また重量は2.2gである。 106は左右に細かな細部調整を施し抉りをつけるもので、全長2.8cm、最大幅1.6cmを測る。重量は1.9 gである。細部調整の順序は表面が基部から先端に向けて、裏面が先端から基部に向けて施されて いる。107は平基式で、表裏ともほぼ全面に細部調整を施すもので、全長2.9cm、最大幅1.5cmを測る。 重量は1.9gである。108~112は凸基式のものである。108は表裏に素材剥片からの大剥離面をその まま残す小型のもので、全長2.4cm、最大幅1.2cmを測る。重量は0.9gである。109は左右に細かな調 整剥離を丁寧に施すもので、全長2.6cm、最大幅1.5cm、重量1.6gである。細部調整の順序は基部か ら先端に向かって施されている。110は縦断面三角形状のもので、裏面に大剥離面をそのまま残すも のである。全長は3.4cm、最大幅1.4cm、重量2.2gである。111は表裏ともに大剥離面がみられるもの で、向かって右側を中心に細部調整が施されている。全長は3.7cm、最大幅1.4cm、重量1.8gである。 112はほぼ全面に調整剥離を施すもので、全長4.2cm、最大幅1.2cm、重量2.7gである。113・114は凸 茎有茎式のもので、113は裏面中央に素材剥片からの大剥離面をそのまま残すが、茎部まで細部調整 がみられるもので、全長3.2cm、最大幅2.2cm、重量1.8gである。114は茎部の一部を欠失するが、残 存長3.9cm、最大幅2.2cmを測る大型のもので、重量は4.1gである。左右には細かな調整剥離によっ てわずかに抉りがみられる。細部調整は、先端から基部に向かって施されているが一定ではない。

115・116は石錐である。115はほぼ完形のもので、横断面がやや長方形状を呈する。基部には表裏とも大剥離面をそのまま残すが、左右の刃部には表面の向かって右側を中心に細部調整を施すもの



第27図 遺物実測図11

である。全長は3.8cm、重量2.2gである。116は基部を欠失するが、刃部が完全に残るもので、全長4.6cm、最大幅1.0cmを測る。ほぼ全面に細部調整がみられるが、刃部の先端は刃が潰れ横方向の擦痕が観察できる。重量は3.3gを量る。

117は尖頭器と考えられるもので、全長5.4cm、最大幅3.4cmを測る。表面には一部に自然面を残し、 裏面には一部に大剥離面を残すが、ほぼ全面に細部調整がみられるもので、重量は20.9gである。 細部調整の順序は表面が反時計回りに、裏面が時計回りに施されている。

これらの石鏃の色調は、114が灰色であるほかはすべて黒色である。また出土位置は、105がSK – 26、106・107・109・114・115・116が第 3 層、108・111・113がSB – 2、110・117が第 4 層、112が SD – 15である。

「磨製石器」(第28図118~122、図版17の下)

118~122は、磨製石器である。

118~121は石庖丁であり、今回の調査では図示したものを含め10点出土している。118~120は結晶片岩製のものであり、形態的には直線刃で半月形を呈するものと考えられるが、118・119は叩石として転用されており、118は端部を、119は端部及び刃部にも敲打がみられ、本来の形態を失っている。118の刃部には、刃潰し状の細かな調整がみられるが、これは叩石に転用した際の痕跡と考えられる。118・119共に両刃と考えられるが、118の刃部は両面からの研磨によりなだらかに作られており、稜は不明瞭である。また、118・119共に内径 5 mm大の紐孔が確認できる。120も両刃と考えられ、左面には明瞭な稜が認められる。残存部には紐孔は認められない。

121はサヌカイト製であり、残存長15.5cm、幅5.6cm、厚さ0.6cmを測る。形態は半月形を呈するが、 刃部は「S」字状に湾曲していることが特徴である。ほぼ全面に不定方向の研磨痕がみられ、研磨 部は部分的に光沢を帯びているが、剥離面が窪んでいる箇所には研磨調整は及んでいない。刃部は 片刃であるが、稜はやや不明瞭である。紐孔は内径 4 mm、外径 6 mmを測る。

122は、結晶片岩製の太型蛤刃石斧である。全長12.3cm、幅6.6cm、厚さ4.3cm、重量630gを測り、 完形である。柄との装着部分である基部上半には研磨痕がみられるが、基部下半から刃部にかけて は表面が風化し、平滑面は残存しておらず、敲打状の痕跡が認められる。

これらの出土位置は、118がSK-36、119・122がSK-28、120が第 3 層、121がSB-1b炉第12層である。

[礫石器] (第28図123~129、図版18の上)

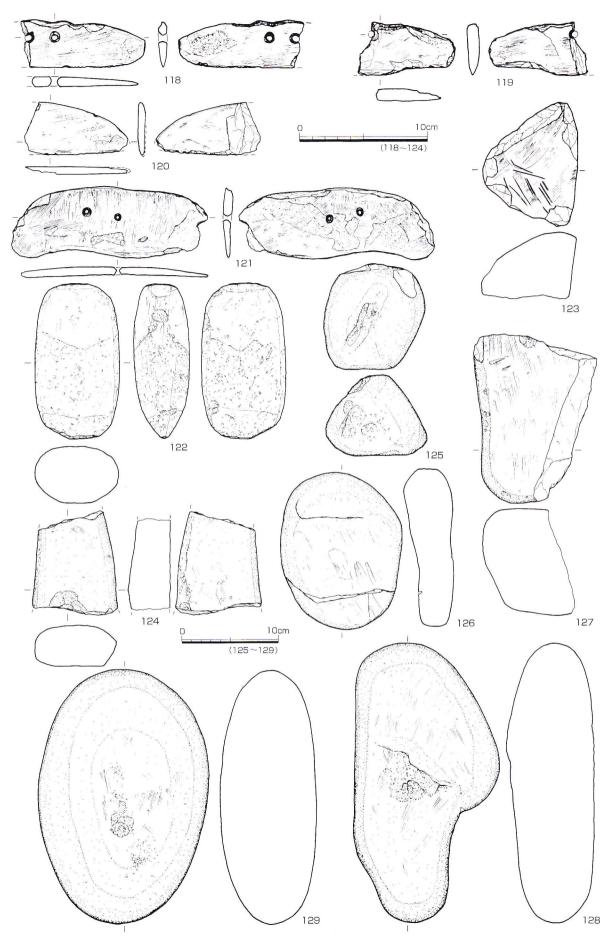
123~129は、砂岩の自然石を用いた礫石器である。

123は、軟質の砂岩を用いた砥石である。欠損部を除くほぼ全面に不定方向の擦痕がみられ、特に右面は直線的な面をもつ。また上面には金属器のような鋭利なものによる筋状の擦痕がみられる。

124・125は、叩石である。124は上面・側縁部を中心に敲打痕がみられ、上・下面には不定方向の擦痕もみられることから、磨石としての用途を合わせもつ複合石器と考えられる。125は上・下端部を中心に敲打痕がみられる。また、上端部から左側縁部を中心に強い被熱部分が認められる。

126は、石皿である。上・下面を中心に不定方向の擦痕がみられ、平滑な面をもち、上面には使用痕とみられる溝状の窪みが部分的に確認できる。また、上縁部を中心に被熱部分が認められる。

127~129は、台石である。127は上面を主に使用しており、細かな擦痕がみられ、直線的な面をも



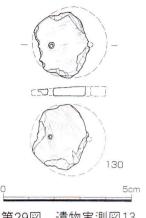
第28図 遺物実測図12

つ。その他に、上面・左側縁部には部分的に敲打痕が認められる。

128・129は、上・下面中央部を中心に敲打が施され、その周囲及び、 側縁部の一部に擦痕が認められ、平滑な面をもつ。

石製品としては、結晶片岩製の有孔円板がある(第29回、図版18の下)。 130は、約1/3を欠損するが、直径3.2~3.5cm大の円形を呈するものと考え られ、厚さは2.5~4mmと一定ではない。両面には不定方向の研磨痕が認 められ、直径2mmの円孔が片側から穿孔されている。

これらの出土位置は、123がSK-28、124・127・128がSK-5、125が P-128、126がSK-21、129がP-150、130がSD-15から出土した。



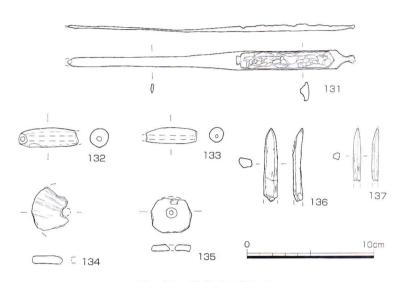
第29図 遺物実測図13

(8)金属製品(第30図、図版18の下)

出土した金属製品は、銅製笄、 鉄製刀子、鉄製釘、鉱滓などである。

131は耳掻き付きの扁平な銅製 笄である。穂先を欠損するもので あるが、残存長22.8cm、厚さ1~ 7 mmで、重さ47gを測る。内面の 文様はサビのため不明である。第 3層からの出土である。

(9)土製品(第30図、図版18の下) 132・133は管状土錘である。132 は両端を欠損するものである。法



第30図 遺物実測図14

量は残存長5.7cm、径1.0~1.5cm、重さ9.5gを測る。133は片端を欠損するものであるが、残存長4.1 cm、 ${\rm Cm}$ 、 ${\rm Cm}$ 、 ${\rm Cm}$ 、 ${\rm Cm}$ 、

134・135は弥生土器壺の破片のを用いた紡錘車である。134は赤褐色を呈し復元径5.4cm、厚さ6 mm、復元穿孔径6.5mmで、重さ6.9gである。135は褐色を呈し、径3cm前後、厚さ5mm、穿孔径8mm で、重さ5.1gである。2点ともSB-2からの出土である。

これらの他、フイゴ、カマド、泥面子なども出土している。

(10)骨角器(第30図、図版18の下)

136・137は刺突具の先端部である。136は残存長5.8cm、厚さ 7 mmで、重さ2.6gを測る。茶褐色を 呈する。137は残存長4.2cm、厚さ5.5mmで、重さ1.7gを測る。136はSB-2bの炉第7層、137はSK-24からの出土である。

これらの他、小動物の骨や魚骨が出土している。

7. まとめ

今回の調査では、太田・黒田遺跡の中心部にあたる地点において合計4面の遺構面を確認し、弥生時代前期末から江戸時代にかけての多数の遺構・遺物を検出した。調査地は、第26・45・51次調査の調査成果から、弥生時代前期には南西約60mに存在する環濠に囲まれた微高地にあたると考えられる。

まず弥生時代前期末から中期初頭の良好な遺構・遺物を検出した第5層上面(第3遺構面)では、調査区の南西部及び東部においてピットが集中してみられ、北壁際から南東部にかけては土坑が検出された。ピットの時期について詳細は明らかでないが、土坑にはSK-29・25・24などのように覆土と掘削面である第5層の土質・色調が類似し、底面に炭層がみられるものなどがある。この覆土の状況は、土坑を掘削した後、時間を経ずに埋め戻した結果と考えられ、底面に炭が堆積することから火を使用する目的で掘削されたものと考えられる。またSK-27は、弥生時代前期から中期への過渡期の井戸と考えられるものである。よって、今回の調査地周辺は弥生時代前期末の段階には居住地として機能していたものと考えられる。また、第26・45次調査で検出された環濠とのかかわりについては、環濠の最終堆積に含まれる弥生土器が紀伊第Ⅱ様式の古段階と考えられている。今回の調査ではSK-29・25からはへラ描沈線を多条に施す壺や変がみられ、SK-27の底面近くからはヘラ描沈線を多条に施す広口壺やヘラ描直線文とクシ描直線文を併用する広口壺など環濠の最終堆積とほぼ同時期と考えられる資料が出土した。よって、これらの遺構は環濠と併存したものと考えられる。

次に、弥生時代中期から鎌倉時代までの多数の遺構・遺物を検出した第4層上面(第2遺構面) では、調査区のほぼ全面にピットがみられるようになる。弥生時代中期の遺構としては、調査区の 北西部及び中央部において竪穴住居2棟や土坑がみられ、前期段階と比較して遺構の多様性が指摘 できる。これらの竪穴住居は、出土遺物からSB-1が弥生時代中期前半、SB-2が中期中頃と時 期差が認められるが、第22次調査においても中期の竪穴住居が3棟確認されており、調査地周辺が 弥生時代中期の居住区域の一部として機能していたことを示す資料と考えられる。また古墳時代の 遺構としては、弥生時代の遺構分布に重複する傾向があり、調査区の南西部においては土坑などの 遺構はみられなかったが、調査区の南東部で検出されたSK-5は井戸と考えられるもので古墳時代 前期初頭の集落域を示す資料である。また今回の調査では奈良時代から平安時代前期の明確な遺構 はみられず、遺物もほとんど出土しなかった。しかし、越州窯系青磁が1点出土したことは注意を 要することと考えられる。それに対して平安時代後期から鎌倉時代の遺構は、調査区の全面におい て土坑・井戸などが分布するようになり、南西部分においては2条の溝(SD-16・17)を検出し た。以上のことから調査区の南西部は、弥生時代前期から古墳時代まで遺構分布が希薄な部分と考 えられ、鎌倉時代では溝が掘削されていることから地形的に低い部分であったと考えられる。また 当調査地周辺は、室町時代には太田城の存在した地域であるとされているが、今回の調査ではそれ にかかわる遺構を検出することはできなかった。

次に江戸時代の遺構がみられた第 3 層上面(第 1 遺構面)では、小溝群とその前段階の溝(SD – $14\cdot 15$)などを検出した。これらの溝は耕作にかかわるものと考えられ、太田・黒田遺跡における

江戸時代の土地利用を知る手がかりになるものと考えられる。

また遺物の出土傾向としては、遺物包含層に含まれる遺物全体量のうち、弥生時代前期の遺物量よりも中期以降の遺物量が主体をしめる状況である。よって、これまでの調査成果とも考え合わせると太田・黒田集落の最盛期は弥生時代中期と考えられる。これに対して弥生時代後期の遺構・遺物が遺物全体の1割にも満たない程度であり、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にかけてはSK-5から庄内式併行期の土器群が一定量出土する状況である。また奈良時代から平安時代前期の遺物がほとんどみられなかったのに対し、平安時代後期から鎌倉時代の遺物については遺物全体にしめる割合は多く、特にSK-2・SK-13・SE-1からは大量の土師器皿、瓦器椀・皿などが出土した。注目すべき点は、以前の調査も含め、太田・黒田遺跡において弥生時代後期の遺物・遺構がほとんど検出されていないことで、今後の検討が必要である。

今回の調査地における土層堆積状況については、古墳時代から鎌倉時代の遺物包含層がみられなかった。これは第4層上面の標高が西部にかけて低くなり、その上部に室町時代の遺物包含層である第3層が堆積する関係から、調査地周辺は弥生時代中期以降は東から西に傾斜するゆるやかな傾斜をもつ微高地であったと言える。また第3層が調査地の北側ではみられなかったことから、室町時代以降に今回の調査地周辺は大規模な改変を受けたものと考えられる。

さらにサブトレンチによる調査では、第6層上面(第4遺構面)から切り込む遺構を確認することができた。これは太田・黒田遺跡における弥生時代前期の生活面がさらに下層に存在するということであり、太田・黒田遺跡の弥生時代前期集落の成立を考える上で注目される。また第6層下に堆積する第7層は褐灰色のシルトであり、第26次調査の第7b層、第45次調査の第7層、第47次調査の第8層など過去の調査においても類似した堆積が確認されている。特に第47次調査ではこの土層から弥生時代前期の土器片が出土しており、太田・黒田遺跡の最も古い段階の遺物として注目される。今回の調査ではこの第7層からの遺物は確認していないが、今後中心部での調査がさらに進めばより集落の出現時期について明らかになるものと考えられる。ただ、第7層以下の状況については第4~6層上面が東から西にかけて傾斜するものに対し、西から東に掛けて傾斜する状況を確認した。よって、太田・黒田遺跡の出現する段階の立地条件と出現後の立地条件には違いがある可能性を指摘しておきたい。

以上、今回の調査では弥生時代から江戸時代にかけての多くの遺構・遺物を検出し、本調査における各時代の様相について把握することができた。太田・黒田遺跡は今回で52次にわたる発掘調査を数えるが、近年その全体像について少しではあるが明らかになりつつある。今後さらに引き続き遺跡の中心部やまた縁辺部において調査・検討を行っていくことが必要であると考えられる。

【参考文献】

『太田・黒田遺跡 第26次調査発掘調査概報』(財和歌山市文化体育振興事業団 1995年

『太田・黒田遺跡 第45次調査発掘調査概報』(財和歌山市文化体育振興事業団 2001年

『太田・黒田遺跡 第47次調査発掘調査概報』(財和歌山市文化体育振興事業団 2001年

報告書抄録

ふりが	な	おお	おおだ ・ くろだいせき だい52じはっくつちょうさがいほう								
書名		太	太田・黒田遺跡 第52次発掘調査概報								
副書	名									l	
巻 次											
シリーズ名		和歌山市文化体育振興事業団調査報告書									
シリーズ番号		第33集									
編著者名		藤	藤藪勝則・北野隆亮・奥村 薫・川口修実								
編集機関		財	財団法人 和歌山市文化体育振興事業団								
所 在	地	₹	〒640-8227 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL073-435-1195								
発 行 年 月 日 西暦 2002年3月31日											
ふりがな	2000 (6)	がな	コー	- F	· 北約	韋	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所 7	生 地	市町村	遺跡番号	1.2.0		2111	17.47.41.4	(m²)		
太田・ 和歌 (55だいせき 黒田遺跡 和歌 (55		山市	3020150	327 356	34° 13′ 41″		135° 11′ 51″	20010828	120	集合住宅建設	
所 収 遺 跡 名 種		锺 別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項		
太田·黒田遺跡 太田城跡			弥生時代 古墳時代 鎌倉時代	竪穴住居・井戸 土坑・溝 ピット		弥生土器・土師器・ 瓦器・輸入陶磁器・ 石器・石製品			弥生時代前期から 古墳時代前期にか けての集落中心部 の調査		

図 版



調査前の状況 (西から)



第3遺構面全景(西から)



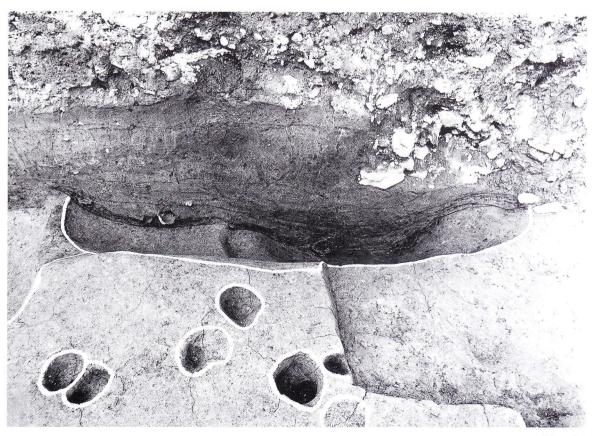
第2遺構面全景(西から)



第1遺構面全景 (西から)



SK-29 (北東から)



SK-25 (南から)



SK-27 (北から)



SK-27土層堆積状況(東から)



SB-2 (東から)



SB-2土層堆積状況(南から)



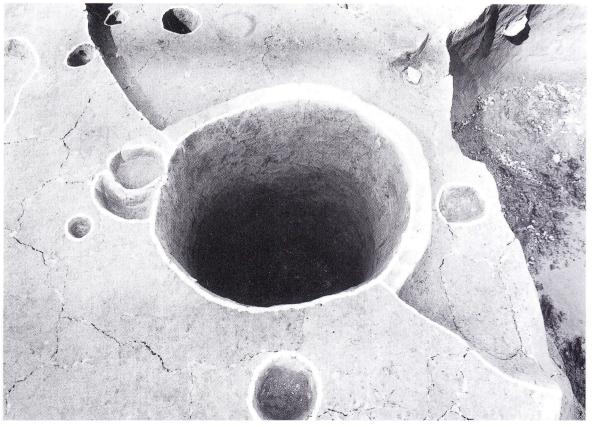
SB-1 (北東から)



SK-5 (北から)



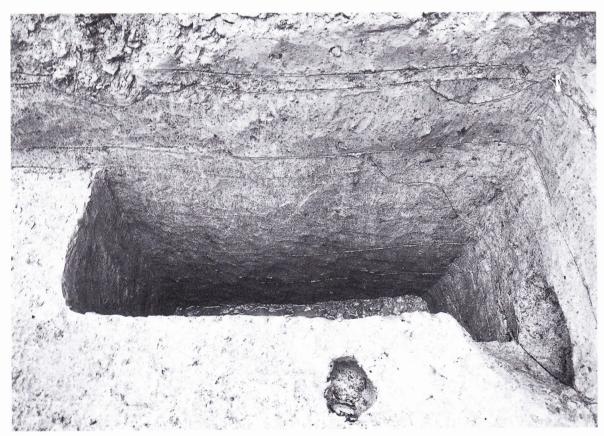
SK-2 (東から)



S K - 13 (南から)



調査区南壁 Y = -73937m付近土層堆積状況(北から)



サブトレンチ3 土層堆積状況(北から)



SK-29出土土器 弥生土器 1壺



SK-29出土土器 弥生土器 2 壺



SK-25出土土器 弥生土器 4壺



SK-25出土土器 弥生土器 6壺



SK-25出土土器 弥生土器 7甕



SK-25出土土器 弥生土器 8 甕



SK-27出土土器 弥生土器 10壺



SK-27出土土器 弥生土器 11壺



SK-27出土土器 弥生土器 13甕



SK-27出土土器 弥生土器 12甕



同上 底部



SB-1出土土器 弥生土器 14壺



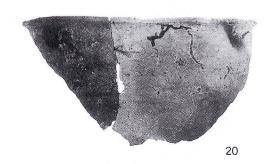
SB-1出土土器 弥生土器 15壺



SB-1出土土器 弥生土器 16壺



SB-2出土土器 弥生土器 18壺



SB-1出土土器 弥生土器 20鉢



SK-5出土土器 土師器 21壺



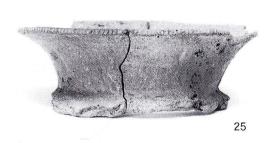
SK-5出土土器 土師器 22壺



SK-5出土土器 土師器 23壺



SK-5出土土器 土師器 24壺



SK-5出土土器 土師器 25壺



SK-5出土土器 土師器 26壺



SK-5出土土器 土師器 27壺



SK-5出土土器 土師器 28壺



SK-5出土土器 土師器 29壺



SK-5出土土器 土師器 32甕



SK-5出土土器 土師器 34甕



SK-5出土土器 土師器 37鉢



SK-5出土土器 土師器 31壺



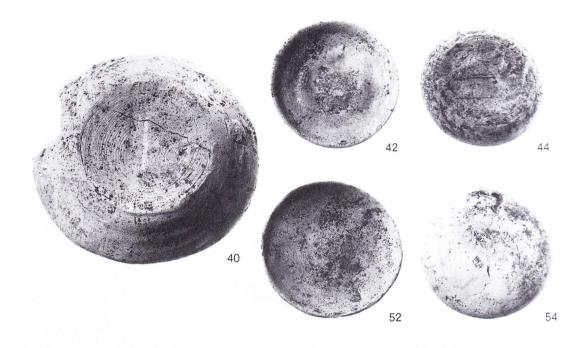
SK-5出土土器 土師器 33甕



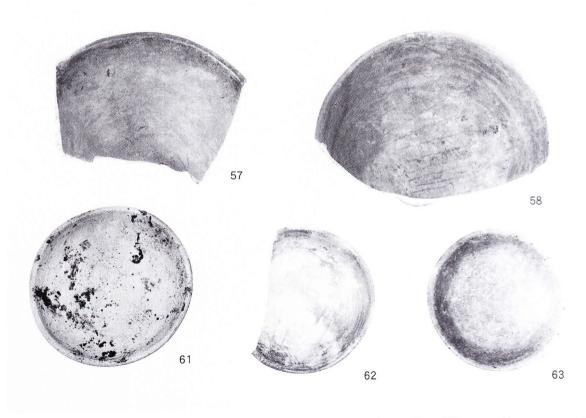
SK-5出土土器 土師器 36鉢



SK-5出土土器 土師器 38鉢



SK-2出土土器 土師器 40·42·44·52·54皿



SK-2出土土器 瓦器 57·58椀 61·62·63皿





SK-13出土土器 土師器 65皿

SK-13出土土器 土師器 67皿



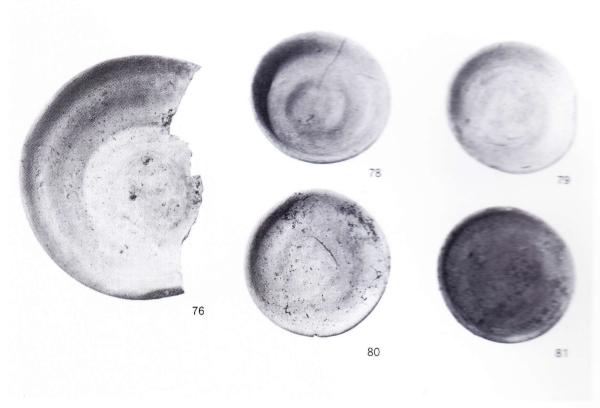
SK-13出土土器 瓦器 71椀



SK-13出土土器 瓦器 72椀



SK-13出土土器 土師器 70釜



SE-1出土土器 土師器 76·78~81



SE-1出土土器 瓦器 83椀



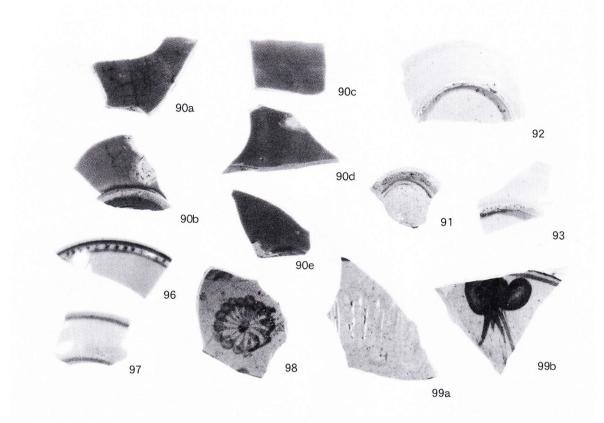
SE-1出土土器 瓦器 84椀



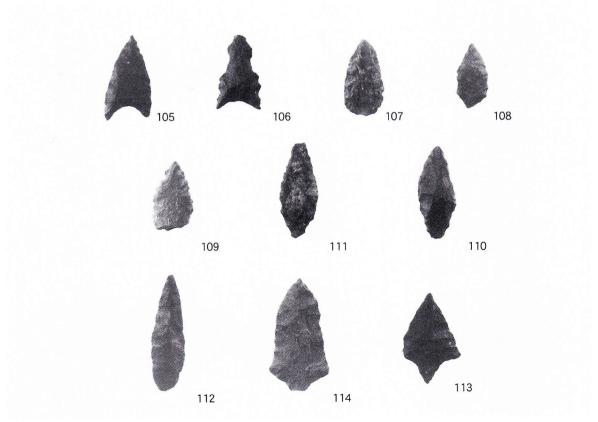
SE-1出土土器 瓦器 85椀



SE-1出土土器 瓦器 86椀



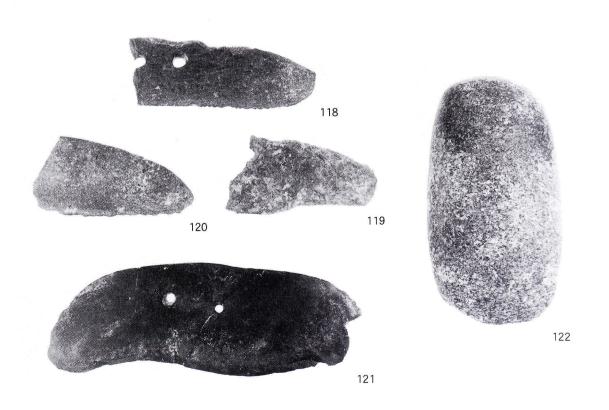
輸入陶磁器 中国製青磁 90鉢 中国製白磁 91椀 92·93皿 中国製染付 96~98皿 99盤



打製石器 $105 \cdot 106$ 凹基式石鏃 107平基式石鏃 $108 \sim 112$ 凸基式石鏃 $113 \cdot 114$ 凸基有茎式石鏃



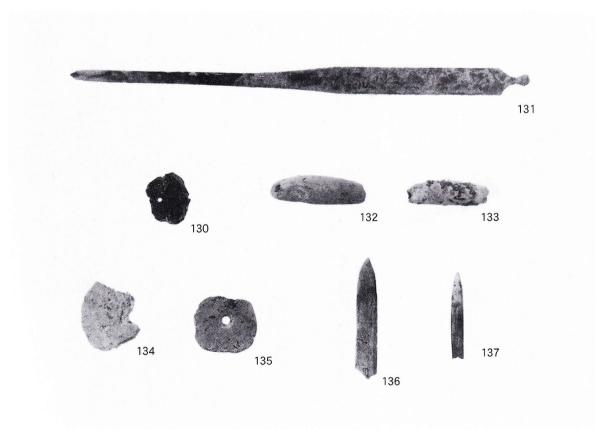
打製石器 115·116石錐 117尖頭器



磨製石器 118~121石庖丁 122太型蛤刃石斧



礫石器 123砥石 124叩石 126石皿 127·128台石



石製品 130有孔円板 金属製品 131銅製笄 土製品 132·133土錘 134·135紡錘車 骨角器 136·137刺突具

文化财室

平成14年3月31日発行

太田·黒田遺跡 第52次発掘調査概報

編集・発行 (財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印 刷 中央印刷株式会社

⑥(財)和歌山市文化体育振興事業団 2002